

---

# 全校生徒の嫌われ者

新木吾妻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全校生徒の嫌われ者

### 【Nコード】

N6321C

### 【作者名】

新木吾妻

### 【あらすじ】

俺はどこにでも居る平凡平均一般高校生。怖いもの見たさって言うかちょっととした同情って言うか……首を突っ込んだのが間違이었다！

## 第一話 プロローグ

「痛ってえ」

放課後の学校の廊下、急いでいた俺は出会い頭をやっちまった。

「大丈夫か？」

直ぐに体を起こしてぶつかった女の子に駆け寄る。  
女の子は持っていた物をぶちまけてしまっていた。

「痛えな！あぶねえだろ！」

「……………なんて口の悪い女だ……  
ちなみに最初の『痛ってえ』も俺じゃない。  
思わず固まってしまっ。」

「おい、謝れよお前」

お互い様だろう…と思ったがコイツは俺より派手にしりもちをついている、謝るべきなのかもしれない。

「……………悪い」

謝りながら手を貸す。

「ちっ」

ぱしっと俺の手を払って自分で立ちあがる、舌打ちしながら！

なんてヤツだ！

「……………なんだよ？」

「…別に…」

口の悪い女は荷物をかき集めてさっさと行ってしまった。

廊下に取り残された俺。

……………

はっ！急いでたんだっ！

コツンと何かを蹴とばした、見てみると携帯だ。

さっきの女の？って違う俺の携帯だし！

さっき落としたらしい、携帯なんてほとんど使わないので間違えそうになってしまった。

とにかく急ごう！

拾って駆け出す。

「悪い、遅れた！」

「遅えつて！リュウ」

待ち合わせていたファーストフード店に駆け込むと待ち人のケンジはおかんむりのご様子だ、隣には知らない女の子…実は今日の目的は彼女だったりする…

「ごめんって、ここは俺が払うから」

変な女のせいでもあるが遅れたのは事実なのでしようがない。

「当然だな、じゃあ早速紹介しようか、コイツは河本竜一」

「どどどうも、河本竜一です」

やばい、今になって緊張して声の上擦ってしまった…

そうなのだ、彼女がいない俺は友達の子をケンジに女の子を紹介してもらう約束だったのだ。

「あ、どうも、ケンジの同中のヒロコです」

彼女も緊張しているのか声の上擦っている、ちょっと遊んでそうなのだ（偏見）。

「じゃあ後は頑張って」

「ああ、わかった…って待てい！」

退散しようとしたケンジの襟首をあわてて掴む。

「ぐ…なんだよ、俺がいてもしょうがないだろ？」

「頼むよ、居てくれ！俺が異性とまともに話せないの知ってるだろ？」

掴んだ襟首を引き寄せて囁く。

「わかったから離せ、ったく…最初だけだぞ」

その後ケンジの助けもあってどうにか打ち解ける事が出来た。

そしてようやく緊張がほぐれてきた頃俺の携帯が鳴った。

ピリリリリリリ

初期設定のままの電子音、開いてみると知らない番号…

あれ…どっかで見た様な気もするなこの番号…

「…ごめん、ちょっと出るね…もしもし？」

一応、二人に断って電話に出る。

『出やがったな、この野郎』

？

「は？」

電話に出るといきなりドスのきいたでかい声が聞こえてきた、しかも女…コイツは…

『おい、聞いてんのか！ドロボー野郎！』

やっぱりさっきの口の悪い女だ。

「なっ…なんだよそれ、だいたいどうして俺の番号知ってんだよ」

『アホか！その携帯はあたしんだ！このチ○カスが！』

えっ…？

ひわいな暴言は置いといて…

「コレ…違うの？」

『お前のはあたしが今話してるやつ、ぶつかった時に入れ代わったみたいやね、同じ機種で同じ色だし』

おまけにストラップも付けてないし着信音もデフォルトのままも一緒らしい…

どおりで見た様な番号だったんだ…

………

「どっしりよっし…？」

『どっしりよっしもこっしりよっしもあるかい、配達せんかい』

「はあ？どっして俺が…今友達といて忙しいからお前が来いよ」

カチンときて反抗してしまった、考えてみると先に持ち逃げしたのはコイツな気がするし。

『嘘こけ、どうせ友達なんて……ぷっ』

何？吹き出したぞコイツ。

『お前の携帯の電話帳… 9件しか登録してないでやんの、ぷぷぷぷ』

グサツ

「う、うるせえな、俺は掛けないヤツの登録はしないんだよ！」

本当は本当に友達が少ないかもしれない、ケンジ他数人の男友達と親しか登録してない。

『ぷっ、だってメール履歴なんて母親がほとんどだろ？ 今日の晩ご飯何？ つじゃねえよ、ぎゃははははは』

一気に顔が紅潮した。

「うるせえ！水色縞パンツ」

『なっ、お前、見やがったな！』

「さっき廊下でぶつかった時にバッチリ確認済みだ」

『この変態野郎！金払わす』

その後、延々20分程の口論の後、結局俺が折れた。

「……どこに行けばいいんだよ……」



『久住ヶ丘駅前の居酒屋はつみってとこるに来いよ、あたしン家だから』

了解して電話を切る。

「ごめん、二人とも……ってあれっ……？」

電話を終えて二人に向き直るとヒロコさんの姿が無かった。

「呆れて帰ったぞ」

ケンジがすごい訝しげな顔で言う。

「えっ……そんな……」

「当たり前だ、っていつかお前今の女なんだよ？いつの間に引っ掛けたんだ？」

「はあ？違っつて！名前も知らない女だよ」

「マジ？すごい仲良さそうだったじゃん」

そうなのか？

とりあえずケンジに事情を説明してみた。

「ソイツは八神棗やがみなつめだな、お前もついてないな……」

「知ってるのか？」

「知ってるも何も有名だぞ、今世紀最強の毒舌とか史上最悪の性格  
ブスとか言われてる、全校生徒の嫌われ者だ」

すごい言われようだな…そこまで悪いヤツには思えないけど…  
毒舌は納得だけど…

「はぁ…とにかく行ってくるよ…」

「気をしっかり持てよ、廃人にされるぞ」

そんなにすごいのか…

向かう途中に八神の携帯を開く、俺も見られたのだから両成敗だ。  
俺より少なかったら笑ってやる。

電話帳を開いてみて少し驚いた。

お母さん

一件だけ…

着信履歴と発信履歴も見てみる…俺の携帯からの着信以外全てお母  
さんだった。

ケンジの言葉を思い出す…

全校生徒の嫌われ者

笑えなかった…

駅前に着いた頃には辺りは薄暗く夜の帳がおり始めていた。また悪態をつかれるのかと思うと気分が落ちてくる。

大衆居酒屋はつみ

看板のおかげで八神の家は直ぐに見つかった、一階が店舗で二階が住居になっている。玄関は裏手の様だったのでに開店している店舗の方に入る事にした。

「いらっしゃい…あっ」

店に入ると目の前にエプロンをつけた八神がいた、俺を見てなんか嫌そうな顔で固まってる。

「……………」

廊下の時には気付かなかったがコイツ容姿はマトモだ、むしろかわいの方かもしれない。

「あんだよ、ジロジロ見てんじゃねえよ、さっさと携帯返せ！」  
黙っていれただけど。」

「あら、なつちゃん、お友達？」

カウンターから和服の女性が声を掛けてきた、八神の母親だろう。

「こんばんは、河本です」

「何あいさつしてんだよ、携帯置いて帰れ」

「ダメですよ、なつちゃん、お友達に対してそんな事言っちゃいけません」

似ている気もするが表情と口調が正反対だ、本当に親子か？

「ほら、交換だ」

店には他の客がいたので八神の言うようにさっさと携帯を交換して帰る事にした。

携帯を取り出そうとポケットに手を突っ込もうとした時…

「ねえ、河本さん、晩ご飯食べました？」

「「は？」」

八神のお母さんの言葉に俺と八神が同じ返答をして八毛る。

「良かったらご飯食べていってくださいな」

「いや…」

「お母さん！コイツにメシなんか食わせる事ないよ」

俺より先に八神が失礼な発言をしやがる。

「なっちゃん！」

お母さんに一喝されると八神はおとなしくなる、なるほど…お母さんには弱いらしい。

さあさあとカウンターに座らされてしまった、俺は了承してないのにご飯をご馳走になるのが決定してしまったらしい。

「お前食ったら即帰れよな」

「わかってるよ、うっせえな」

待っている間、頂いている間に入れ替わり立ち代わりに常連の接客をする八神を見ていた。

柄の悪いおっさん達に混ざるとアイツの口の悪さは妙に馴染む、酒の味はわからないがみんな楽しそうだ。

「いつも手伝ってくれるんです」

お母さんがお茶を出してくれながら言った。

「学校の事話さないけど…あの子…楽しくやっていますか？」

……

今日知り合ったなんて言えなかった、アイツが学校でどんな生活をしているかなんて知らない。

でもケンジの言っていた『全校生徒の嫌われ者』…

ケンジは人を嘲笑する様なヤツじゃない、でもケンジは淡白に言っていた。

そして携帯の電話帳…

わからない、でも後ろでおっさんと笑い合っている八神、環境がそうさせたのか…地をやっているのかわからない…でも俺は少し踏み込んでみたくなった。

「河本さん？」

「あつ、はい、……楽しくやっています」

言った。

「そうですか…仲良くしてあげてくださいね」

「はい」

しばらくしていい加減おいとまする事にした。

「じゃあご馳走様でした」

「ちゃんとおもてなし出来なくてごめんなさい…でもまた来てくだ  
さいね、なっちゃん、河本さんが帰るみたいよ」

「ああ？お前まだ居たのかい」

くっ…俺は間違ってるのか？  
でも後戻りできないんだ。

「ちよつと来いよ」

「あつ、お前触んなよ」

ぐいぐい腕を引っ張って店の前に連れて行く

「てめえ、痛てえだろが！」

ぶんって振り払われた。

「ほら、携帯…交換するぞ」

さっき交換しそこねていた携帯を差し出す。

「ああ、そうだったな…ほれ」

八神も携帯を出して交換した。

「俺の番号とアドレス登録しておいたからな」

「はあ？お前なにしてんだよ！」

「いいじゃん、俺も登録するし」

「ふざけんな！いらねえ番号入れんなよ！」

「いらなくないだろ友達なんだから」

俺は勢いに任せてなかばヤケクソだった。

「……………えっ？なんで？」

「なんで……………ってダメ？」

「……………」

黙ってしまった。

でもかなりおとなしくなった、コイツわかりやすいかもしれない。

「じゃあそついう事で、また学校でな」

「……………下僕……………」

去り際に嫌な発言を聞いた気がした……





## 第二話 厄災始まる

朝：眠い目を擦りながら朝食のトーストをもぐもぐ……

「リュウちゃん、早く食べないと遅刻しちゃうよ」

正面の母さんの声、急かすべき内容だがその声はゆったりとあまつたるいやる気を削ぐ様なぼわぼわした声だ。

「竜仁は？」  
たつひと

竜仁は弟、現在中三…ちなみに俺は高二だ。

「たっちゃんは夜更かししちゃうたみたいでまだ寝てるの……かわいそうでまだ起こしてないの……」

……いやいや……

遅刻しちゃう方がかわいそうではないか？

母さんは息子の俺が言うのも何だが超過保護だ、全国の母親達がどうかは解らないがかなりトップクラスのキングオブ過保護だと思う。

「もぐもぐ……ゴクン……いいよ…俺、もう行くから、起こしてから出るよ」

母さんに任せておくと竜仁は遅刻確定なので起こしてやってから通学する事にした。

「そう？じゃあ優しく起こしてあげるのよ？」

たかが起こし方一つでも、すごい不安そうな顔で心配する母さん…

…俺達河本家は三人家族…俺…弟の竜仁…母さんの三人…

父親は俺が小学校に上がる前に若い女とどっかに行ってしまった。

だから俺と竜仁は母さんに育てられた、父親なんか知らん。

母さんは父親をずっと待っているらしいが理解出来ない…

まあ父親が居なくて困った事は一度も無い…

母さんはおっとり天然箱入り系だが、実は遣り手の女弁護士ではっきり言つて家は裕福だったりする。

「うちそうさま…」

「デザートは？」

「…いや、帰ってきたら食べるから…ごめんね」

しゅんとうなだれる母さんを見ない様に竜仁の部屋に行く。

「竜仁！起きろ！」

部屋に押し入って寝ている弟をがんがん揺さぶる。

「…んああ…兄ちゃん…うつせーよ…」

寝惚けながらくそ生意気な事を言う竜仁……

「起きないと遅刻するぞ！」

寛大な兄として暴言は無視、諦めずに起こしてやる。

「……………昨日……遅くまでエミと電話してたからさ……………眠いんだよ……………」

こんの……ガキ……………

……我が弟はモテる……………

彼女居ない歴17年弱の兄と違い、弟は中学に上がった位から取っ替え引っ替えに女の子と遊んでいる……………  
顔なんてほとんど一緒なのに……………

「……遅刻しちやえ！」

寛大な兄などこの家には居ません！

弟を放置して家を出てやる事にした。

自転車で学校へと走る。

俺の行っている学校は私立。

だけど近隣に在住していれば公立と変わらない位の授業料で受験のハードルもそれほど高くないという素晴らしい制度を持っている。なんでも町に住む金持ちが道楽で作った学校らしい…まあそのお陰で久住市に住む高校生のほとんどが在学するという大きな高校だ。

家を出て二十分、その高校『久住ヶ丘高校』に着いた。

無駄にデカい高校…生徒数は1500人位居るらしい…

それだけ人数が多ければ見た事無いヤツも多い。

俺が八神を知らなかったのも普通だと思う。

噂とかに興味が無くて情報に疎いのも要因の一つだけど…

その八神だが、無理矢理番号とアドレスを交換してから一切連絡は無い。

俺からの連絡もしてない。

クラスも知らないし…そういえば学年も知らない…

しかし八神のお母さんにああ言ってしまった手前少し気になる…

昼休みにでも捜してみようか…

「おーす！リュウ！」

ケンジだ、中学からの腐れ縁のケンジはクラスも一緒だった。

「おはよう……」

朝からテンションの高いケンジに疲れた挨拶を返す。

「何だよ……元気無いな……そうか、昨日八神に色々やられたか？」

「えっ？」

「えって何だよ……八神に会いに行ってたじゃないの？」

「そうだけど……別に変な事は無かったよ」

「へえー……まあお前は少しマゾっ気があるからなあ……」

……

「はあ!?!」

「ぷっ……ふははははは！冗談だって！冗談！」

昼休み……俺は早々に昼食を済ませて八神を捜してみる事にした。

ケンジの話だと同学年でクラスはJ組。

二年はA組からL組まで12クラスある、俺はC組…とりあえずJ組に行ってみる事にした。

居た。

教室の一番後ろの席で一人で弁当をつついていた。

J組の他の奴らは各々友達と弁当なりパンなりを囲んでいた。

ここでまたケンジの言葉がちらつく。

『全校生徒の嫌われ者』

……………

偶々だろうか……………

毎日だろうか……………

駄目だ…一度気になると八神が気の毒に思えて仕方が無い……………

俺はこんな他人に干渉したり心配する様な事は少ないのに……………

見ていられなくてJ組を後にした。

放課後：やはり八神が気になってJ組に行ってみた。

HR直後、教室からわらわらと出てくるJ組の生徒達……八神は出てこない……

しばらく眺めていても出てこないの、J組の教室を覗いてみた。

やっぱり居た。

自分の席らしい一番後ろの席で携帯をいじくっていた。

教室には八神の他に数人の生徒しか居なかった。  
誰も八神に話し掛ける奴は居ない。

……

俺はお節介なのだろうか？

「おす」

気が付いたら声を掛けていた。

教室に残っていた数人の生徒達が怪訝な表情で俺を見てくる、ちょっとだけ居た堪れなくなる。

「?????」



声に反応して携帯から目を離す八神、明らかに不機嫌そうに俺を見た。

「……………えっと……………いや……………元気？」

声を掛けたはいいが何を話すかなんて考えていない……………

口籠ってあたふたしてしまった……………ヤバイこれじゃただの変な奴だ。

「あんだよ……………おめえ……………馬鹿にしてんのか？」

相変わらずドスの効いた声を発しながらみるみる眉が吊り上がっていく八神。

「あつ、いや、その、えっと、昨日言ってたじゃん！ほら、何だっけ、下僕……………そう下僕！……………下僕？」

パニックになって訳の解らない事を言ってしまう……………

俺は後でこの発言を激しく後悔する事になる。

「……………ほう……………おめえ……………あたしの下僕志願者だったのかい？」

ニヤリといやらしい笑みを溢す八神……………

周りからひそひそと俺を中傷している様な話し声が聞こえてくる。

「い、いや……………」

「よし、許可してやんよ！おめえは今からあたしの下僕だかんよ！」

この一言で俺の高校生活が終わった気がした。

そして下校中、俺は八神を後ろに乗せて自転車を走らせていた。

俺はちよつと得した気分になっていた。

下僕といってもこの程度の事だったらむしろ嬉しいくらいだ。

八神は黙っていればかわいいし、背中に感じる八神の確かな手応えも俺の俺自身をやる気にさせていた。

しばらくして駅前の八神の家に到着。

「おお、ご苦労、じゃあ明日は8時にここに来いや」

???

「は？なんで？」

「あんだと…この野郎…あたしを迎えに来てって言ってるんだよ！下僕やるが！」

「あ、ああ、ごめん…そうだったね」

俺は何も言っていないのに明日も迎えに来る事が決定していたらしい…

「使えんガキが！さっさと帰れや！いも猿！」

いも猿？

「わ、わかったよ」

しっしって追い払われて八神の家を後にする。

………

なんだよ…

別に悪くないぞ…

口は悪いけど八神は嫌な奴ではないと思う。

八神の容姿ならケンジの言っていた様な事は目を瞑れる範囲内だと思っ  
思う。

翌朝、八神に言われた通りに8時に八神の家に着。

携帯で呼び出す事にした。

しばし呼び出し音の後…

『…あんだよ』

すごい不機嫌な声だ。

「…えーおはよう…迎えに来たよ」

少しだけ頭に来たが流して要件を伝える。

『…ウザ……本当に来んなよ……誰がおめえと一緒に行くかよ……出直せや……うすら猫が』

ブチって切られた。

うすら猫？

って何か何？

自分で迎えに来てって言うってたじゃん！

「んあああ！むかつくう！なんなんだ！あんのアマあ！」

周りからひそひそと話し声が聞こえる……そついえば駅前だということを忘れていた……

渋々一人で学校に向かう……

もう少しで到着という時。

ピリリリ

ポケットからの電子音。

着信 八神棗

「……………」

取ってみる。

『おめえ……！何先に行っただよ！下僕！』

なんて理不尽な……

「……お前が俺と行きたくないって言ったんじゃないか！」

『黙れや、戻って来んかい……でこマグロが』

ブチって切られた。

でこマグロ？

って何か何？

自分で出直せって言ってたじゃん！

「……出直せ？……あ〜っもう！」

もう遅刻は確実だが…渋々自転車をＵターンさせる。

八神の家の前には八神が怒りを露にして仁王立ちしていた。

「遅いわ！８時って言ったやろが！」

理不尽だ…理不尽過ぎる……

「うるさいな…いいから早く乗れよ、授業まで遅刻するぞ？」

HRはまず間に合わない…飛ばしても授業に間に合うかどうかというところだ。

「下僕が口堪えすんなや！……使えんガキが！ちびカマキリが！」

ちびカマキリ？

八神を乗せて首を傾げながら渋々自転車を発進させる……

「はああ…」

四時間目終了と同時に大きなため息を吐く俺……

「なんだ？リユウ…どうした？」

後ろの席のケンジが興味深そうに訊いてくる、決して心配してでは無さそうである。

「……いや…なんとなくケンジの言っていた意味が解ってきたよ…」

「………お前八神に目を付けられたらしいな………」

俺の肩に手を置いて可哀想な物を見た様な顔で首を振るケンジ……

このやるお…

ぶるぶる

ぽっけから振動……

開いてみると…

着信 八神棗

「はああ…」

再びため息…

実は一時間目終了の休み時間から今まで授業が終わる度に呼び出されている。

やれ授業準備の手伝いだとか…やれノート貸せだとか…

そしてその度に怒濤の毒舌で攻撃されてきた…

やれ遅いだとか…やれ字が汚いだとか…顔が変だとか…

正直嫌々だが渋々」組に向かう俺…

「どMめ……」

後ろでケンジが何か失礼な事を言っていた……



### 第三話 後悔から変化

午前7時半頃…

「あれ…兄ちゃん早くね？もう行くの？」

玄関で靴を履いていると、丁度起きて来た竜仁に声を掛けられる。竜仁の言う通り、いつもなら俺も起きるくらいの時間だった。

「……ああ、行ってきます…」

「…兄ちゃん…なんか疲れてない？」

「…ほっといってくれ…」

八神に下僕宣言をしてから三日目…

今日も8時には駅前にスタンバイしていなくてはならない…

ちよっと早めの時間に自転車を駅前に向け走らせる。

ふと思った。

俺ってマゾなのかなあ……

嫌だなあ……

8時前……駅前に到着……

罵られるのを解っていないながら電話を掛ける。

しばし呼び出し音の後……

『……懲りもしねえでまた来たのかい……』

案の定理不尽発言をする八神……

これで先に行ったとしても怒られるのだから理不尽極まりない……

「……ごめん……下で待つてるからなるべく早く降りて来てよ……」

自分を押し殺して下手に出てみる。

『……ほう……中々殊勝やんけ……いいやん、待っとけや、カス犬』

カス犬？

「うん、なるべく早くね？」

『黙れや、ボケカス』

.....

15分後…ようやく降りて来た八神…

今からなら少し飛ばすだけで十分間に合う。

「やあ、おはよう」

「……………キモいわ、おめえ……………」

こんのママあ……………

い、いや…静まれ…

静まれ…俺…

悟れ……………悟るんだ…

「何ぶつぶつ言ってやがる…頭イったか？」

すごい嫌そうな顔で覗き込まれる。

ちよっと近かった。

ちよっとドキっとした。

「い、いや、何でもないぞ……………」

あんな嫌そうな顔にドキドキすんなよ、俺ってば……

八神を送り迎えしはじめて3日目…

遅刻しないで登校出来たのは初めてだった。

もちろん周りには他の生徒達も居る…

そんな事ないのかもしれないけど、すごい注目されてる気がする。

ひそひそ

「ほら、あれが八神さんの下僕だって…」

ひそひそ

「あれ、誰？」

ひそひそ

「知らない…でも、中々勇敢よね…勇者だわ…」

ひそひそ

「何か弱味でも握られてるんじゃないの？」

ひそひそ

「…そうかな…パシられてるの気付いてないんじゃないの？なんか馬鹿そうだよ…」

ひそひそ

「言えてる…もしくはどMね…」

……………

そんな事ありまくりだった……

八神と別れてC組の教室に入る。

「よう、八神の下僕！」

「……………」

教室に入った途端、ケンジがにこやかに挨拶して来た、なんか変な呼び方で…

「…八神に下僕宣言したらしいな…すごい噂だぞ？どうした？」

「……………」

ケンジだけじゃない、クラスの全員が俺に総注目してる。

みんな俺みたいなのへタレが八神と一緒に居るのが意外らしい。

「…いや…えーと……」

俺は迷っていた…

成り行きだと誤魔化すか……

友達になつたと言うか……

……

俺は……

「……いや……成り行きでさ……絡まれたら……断れなくて……」

前者を選んでしまった……

その時に頭に浮かんだのは八神のお母さんだった……

次は八神の家で見た八神の笑い声だった……

後悔した。

ひどく申し訳ない気持ちになった。

「やっぱりな！お前と八神なんて接点無いし、お前じゃ流石に無理があるって！」

ケンジのフォローに少し苛付いてしまう…

「かわいそ〜！河本災難だね！」

「どうにか誤魔化して早く解放してもらえよ！」

「おかしいと思ったよ、有り得ないよ」

違う…

「……ははは…」

初めて自分で自分を最低だと思った…

俺は今までとにかく普通に…

全てが平穩無事にいけばいいと思っていた。

何事にも当たり障り無く…厄介事には関わらない様に…  
こうして初めてその渦中に入って解る…

たまったもんじゃ無い……

八神はずっとこうしてみんなからのやつかみに揉まれてきたのだからか？

そういえば何時からなんだろう……  
どうしてみんなからここまで陰口を叩かれ、忌み嫌われなくてはならないのだろうか……

もう一つ……

どうして俺はここまで八神を気に掛けるのだろうか……

昼休み。

俺は駅へと続く道を走っていた。

今はただの昼休み、午後からの授業はもちろん通常通りにある。  
しかし俺は走っていた、駅まで行って帰ってくるだけで昼休みの時間のほとんどを消費してしまうにも関わらず走っていた。

駅前…全国にチェーン店があるフランチャイズ的なコーヒーショップに突入…

「…はあ、はあ…ア…アイス…カフェラテ…え…Mサイズ…」

「…!?……は、はい」



様子のおかしい俺に店員さんもびっくりしていた。  
注文したコーヒ―を受け取り、先ほど走って来た学校までの道を再び走る。

なぜこの様なアホな事をしているかということ…  
実は今、俺は下僕活動中なのである。

ことは、ついさっき昼休み開始直後…

「ド〇ールのアイスカフェラテが飲みたい！」

「は？」

例の如く呼び出された俺は、八神の開口一発目の意味不明発言にきよんととしてしまう。

「買ってこいよ」

「は？」

更に続く八神の発言に首を傾げる暇も無い俺。

「下僕が！ご主人様の命令じゃ！ふにゃロバが！」

ふにゃロバ？

「ち、ちよつと待ってよ！駅まで行って帰って来たら昼休み終わっちゃっしょー！」

彼女の言うコーヒーショップは駅前には無い。基本的に学校外に出るのは校則違反…バレたらマズい…自分の自転車を使えば早いが使ったら絶対バレる……

「んなもん知るか、間に合う様に行って来いや」

なんて理不尽！

「ちょ……………いや……」

「何やん、嫌なんかい」

「ううん……………行くよ…待ってる!？」

「は？お、おい！」

意外な顔をして呼び止めようとする八神を無視して走り出す。

俺が了承した理由は一つ……

今朝の罪悪感を少しでも拭う為……

友達と言えなかった後ろめたさを軽減する為……

聞かれた訳じゃないけど、八神に対する申し訳なさを軽減するには謝るしかないのかもしれない……

でもそれは出来ない……

それこそ八神を裏切る事になる気がしていた…  
だから八神の為に何かしたかった…  
理不尽な申し出が今は少しだけ有り難かった…

「 ぜえ、ぜえ… た、ただいま…」

息も絶え絶えに八神の待つ中庭に到着する…

「 ……お、おう… ご苦労…」

ちゃんと待っていた八神は汗だくでふらふらの俺を見て驚愕の様子だ。

「 ……はい… 買って来たよ…」

買って来たコーヒーを渡す。  
おずおずと受け取る八神…

「 ……ありがとう…」

両手でコーヒーを持ちながら少し伏し目がちにお礼を言う八神。

「 ……何だよ…？ 素直じゃん」

お礼を言われるとは思わなかった、思わず嫌味に訊いてしまった。

「 ……ああ！ なんだと！ てめえ！」

例の如く声を荒げる八神、声の感じはいつも通りだがなんとなく顔は怒ってなさそうだ。

「ごめんごめん、それは奢るからさ、勘弁勘弁」

嬉しくなってそう言ってしまっ…っっていうかそのつもりだったし。

「ったり前だ！落第らくだが」

落第らくだ？

少し強引に怒る八神にやはり嬉しくなって笑ってしまっ。

残り少なくなった昼休み…

二人で昼食を始める。

待っていてくれたらしい八神は自分の弁当に手を付けていなかった。

嬉しかった。

隣で俺の買ってきたコーヒーを飲む八神を見ると……

やっぱり嬉しかった。

初めて異性と二人きりで食べる昼食……

いや、八神と一緒にだからだろうか……

楽しかった。

彼女は どう思っ てくれ たら だろ うか？

俺は 残り 少 ない 昼 休 み の 間、自 分 の 中 の 感 情 の 変 化 に 気 付 か ず に そ  
れ ば かり 考 え て い た ……

#### 第四話 下僕初休日（前書き）

大変長らく更新をさぼってしまいました（涙）  
本当に申し訳ありませんです。

## 第四話 下僕初休日

「そついえば兄ちゃんさあ、こないだ言った話はどうなったの？」

「えっ？何が？」

自宅での夕食時、のほほんと母さんの手料理を楽しんでいると、竜仁が思い出した様に俺に切り出す。

要点を掴めない俺は話に首を傾げてしまう。

「ほら、兄ちゃん言ってたじゃん、彼女が出来るかもしれないかもつて…」

「…あ…」

確かに言った…

あの日…ケンジに紹介してもらった前日、俺は期待を膨らませたあまり、調子に乗って竜仁にまで話を洩らしてしまったんだ。

「何だよ、やっぱりダメだった？」

「リュウちゃん…」

母さんが泣きそうな顔で見てくる。

「い、いや！ダメなんて事ないぞ！ちゃんと遊んだりしてるし！」

「本当かよお、兄ちゃん中学ん時から女とマトモに話せなかった

「じゃあん」

もちろん嘘っぱちだったが、竜仁があからさまにバカにして言う。

カチーン

「バカにすんな！お前の遊んでるコよりよっぽどかわいいわい！」

あ…

「いよっし！じゃあ連れて来いよ！」

あ…

「丁度明日は土曜日だし決まりだな！」

「ち、ちよつと待てい！いくらなんでも急過ぎる！」

ヤバイ！

反発した勢いで言っちまったがそんな女何処にも居ない。

「何だあゝやっぱり嘘かあゝ」

くっ…コイツ読んでやがる…

「い、一応訊いてみるよ…まだ付き合ってる訳じゃないからさ…」

「よーし！俺もエミを呼んじゃおうかな、紹介しあったりしてみる？」



あわわ…何だか話がそれしかない状況に持ってかれてる。

「……………リュウちゃん……………」

俺と竜仁が言い合っていた時から終始泣きそうな顔を崩さなかった母さんが眩く。

「か、母さん…どうしたの？」

俺がモテないのが悲しいのだろうか…？  
だとしたらとてもつらい。

「……………リュウちゃんが『じじろ』に……………」

「はあ？母さん？」

「いくら優しいリュウちゃんであっても女性を食いものにする『オス』には違いないのね……………うう……………」

「はあ？ちよっと待ってよ！」

よよよと泣き崩れる母さん……………

ふるふる笑いを堪える竜仁……………

俺はもうため息をつくしかなかった……………

どないせえっちゆうねん。

自分の部屋…

俺は悩んだ挙げ句…

「 という訳なんだ…」

『 ああ〜？ダメだよ』

ケンジに甘える事にしたんだが…  
明らかに煩わしそうに言ってくれちゃうケンジ…

「 そんな事言わないでくれよお」

『 俺の女友達は全員ヒロコと繋がってるからさ…お前何だか評判悪いし』

ガーン

頭の中で効果音が響く。

俺は今まで何事にも当たり障りなく過ごしてきた…お陰で誰からも嫌われない位置を維持してきたと自負していた。  
どうやらそんなものはあっけなく決壊してしまったらしい……

『 …まあ、諦める…じゃあな』

無慈悲な言葉を最後に無慈悲に電話を切る親友…

少し苛つくがケンジの言う事もっともだ、元はといえば俺が調子に乗って竜仁に口を滑らせたのがいけないんだし…俺の家庭内での威厳が下がるのは致し方無い…

…いや…ちょっと待てよ…

俺にも責任は有るが、責任の一端を担っているヤツがもう一人居た。

八神だ。

そりゃあ、俺が廊下を走っていたせいでぶつかったんだし、携帯が入れ替わったのもそのせいかもしれない…

しかしヤツの口の悪ささえ無かったら上手くいったかもしれない…多分…

性格はともかくとして、八神の容姿だったら竜仁も納得するだろう。

よし、八神に責任を取ってもらおう！

早速八神に電話する。

………

「 という訳なんだ」

『 寝言は寝て言えや、ふにゆカニが』

ツーツー

ふにゆカニ？

取り付く島も無かった。

余りのあっけなさに口を開けたまま途方に暮れてしまう。

冷静になって考えたら八神が俺の頼みを聞いてくれるなんて有り得なかつた……

諦めるしかないじゃん……とほほ……

翌日土曜日の朝。

ピリリリリリ！

休日という事で惰眠を貪る俺に耳障りな電子音が響く。

自慢じゃないが俺の携帯はほとんど鳴らない…驚いた俺は一瞬で覚醒してしまふ。

時間は8時、番号通知を見ると八神だった。

「……もしもし？」

『集合』

ツーツー

????

「えっ？」

通話時間2秒…

集合？解りやすいんだか解りづらいんだかよく解らん…  
これは八神の家に来てって事だよな…

なんで俺が…

いそいそと出かける準備を始める俺…遅いと怒られるので急ぐ…寝癖もそのままに八神の家目指して自転車に股がり…立ち漕ぎ全快で駅前に到着する…息も絶え絶えだよ…

……………ん？

「な！何をやっているんだ！俺は！」

八神の集合に疑問を持っておいて、無意識に従ってしまっていると…

まるで俺が下僕みたいじゃないか！

「よし下僕、なかなか早かったやん、感心しちやる」

むかつくタイミングでやたらと高圧的な声が掛る…

どうやらご主人様のご登場らしい…

見てみると私服の八神…何か新鮮だ…Gパンに長袖のTシャツのみ

と些か味気ないが、八神らしいかもしれぬ。

何ともやるせない気持ちになってしまつて苦笑してしまふ。

「店の掃除手伝えや」

絶句した。

何を言つてるんだコイツは…顔はさも当然の様に自信満々だし、胸まで張つて少しのけぞつてる…つかちよつと大きいな…胸…体格はチビだけど中々……

「あんだよ、変な目しやがつて…嫌なんかい」

「い、いや、うん、いいよ……あつ……」

しまった…！胸を見ていたのを怒られたのかと思つた、誤魔化そうとしたら了承してしまつた。ここに來てしまつた以上従つて他無い様な氣もしたが……

「おうおう下僕、素直やん」

うわぁ…むかつくなぁ…

「……はあ、まあしょうがないな」

肩をすくめてため息をはいてやる、わざと嫌味っぽくやつてやつた。

「……なんじゃい！むかつくな！今の！」

当然の様に怒る八神。

「あらあら仲良しそうね、河本さん、おはようございます」

八神の後ろ、お店の入り口から八神のお母さんが出てきて挨拶してくれる。

とてもじゃないが仲良しにこよしには見えなかった気がするけど…

「あ、おはようございます」

怒ってる八神越しに恐縮して挨拶を返す。

「遊びに来てくれたのね、なっちゃん、良かったわね」

ほんわかした雰囲気を出しながらふるふるしてる八神に微笑み掛けるお母さん。

「違うよ、お母さん！コイツは掃除を手伝わせる為だけに呼んだんだよ！コイツは掃除を手伝わせる為だけに呼んだんだよ！」

二回言った？

「なっちゃん！お友達になんて事を言っていますか！」

お母さんの一喝。

「…いじめんなさい…」

おとなしくなる八神…

おお、八神が普通の女の子に見える、どうやらお母さんには全く逆

らう気が無いらしい。

そして貴重な休日になぜか八神の家の掃除をしている俺…

落ち着いて考えてみると、俺の頼みは完全無視されたのに、なんで俺はこんな事をしているんだろう…

…と、頭で自問自答をしてはいるが、体は素直に従ってせつせと掃除してるし…なんか悲しい…

掃除といっても八神の自宅『居酒屋はつみ』は清潔だった。だから掃除は大変という訳ではなかった。

俺は店内の拭き掃除、お母さんは厨房の掃除、八神は買い出しに行ってしまった。

「河本さん、お茶を煎れたので飲んで下さいな」

ほんわかお母さんが気を遣ってくれる。

「あ、すみません………って、えっ？そのお茶は何処ですか？」

お茶を煎れてくれたみたいだが、肝心のお茶が見当たらない。

「なっちゃんの部屋に置いて来ました、なっちゃんも行かせるから



先に行つて待つててあげて下さいな」

えっ？

「えっ？えっ？ちちちよつといいんですか？アイツの部屋なんて？」

絶対『ふざけんな』とか言われるに決まってる。

それに当人の了解も無しに女の子の部屋に入るなんて恐れ多い。

「いいから、いいから、ほらほら、こちらですよお」

ほんわか笑顔でぐいぐい連行される、その完全平和主義の笑顔に逆らうのは酷で従つてしまふ。

あっさり部屋に放り込まれて、ばたんと扉を閉められてしまつた…

八神の部屋…

意外だつた。

八神の部屋は如何にも女の子の部屋といった感じだつた、ピンク等のうすいパステル満開で、ぬいぐるみが所狭しとひしめきあつていた。

ベッドには八神のお気に入りなのかクマのぬいぐるみが当人の代わりに布団を掛けられて寝ていた、もしかしたらいつもは一緒に寝ているのかもしれない。

ちよつと子供っぽい感じもしたが、なんとなく俺は好きだつた。

女の子の部屋らしい甘くていい匂いにぼわっつとしてしまふ。

どたどた〜

「ん？」

がらあ！

「てめえ！何人の部屋に不法侵入してやがる！バカ！変態！たれコアラが！」

たれコアラ？

帰ってきた八神が大慌てで部屋に突撃してきた、よっぽど勝手に部屋に入られたのが嫌だったらしい。  
かなり怒っている様子で今にも飛び掛って来そうだ。

「ちよつと待ってくれよ！お母さんがお前の部屋でお茶どうぞって言うからさあ」

「お母さんとか言うなあ！」

顔を真っ赤にして怒る八神にどうしようも無い俺だったが、そのお母さんの介入でどうか八神は収まってくれた。

お母さんにたしなまれて静かになった八神とお茶を飲んだのだが、正直繋がれていない猛獣と檻の中に居る気分だった。

そして、昼過ぎ…ようやく掃除も終わり、居てもしょうがないので帰る事にした。

「すみません、お昼ご飯まで頂いてしまって……」

前回同様、ご飯をご馳走になってしまっていた。前回でわかっていたが母さんに負けない位に美味しいので遠慮せず頂いてしまった。

美人の女将と黙っていれば看板娘になりうる八神と美味しい料理ならこの居酒屋が繁盛するのも納得である。

「いいですよ、なっちゃんの大切なお友達ですもの、いつでもいらして下さいね」

ほんわか笑顔で送り出してくれるお母さん……  
なっちゃんの友達か……

そう言ってもらっただけで嬉しくなってしまう。  
もし全国過保護ママ選手権大会があるなら、俺の母さんと決勝を争うに違いない。

「はい、お邪魔しました」

お母さんに挨拶をしてから、自転車に股がる。

「……………」

えーと……

「何してるの？」

運転手の了解も無しに自転車の荷台に股がっている八神に訊いてみる。

「……………今度はおめえの家だろが…」

?????

「はあ?」

意味が解らなかった。

俺ん家?

「昨日言ってたべ?何だっけ…えっと…彼女候補を演じればいいんだろ?」

マジで?

少しはさかしそうに言う八神とWで驚いてしまう。

言った、確かに言った。

昨日の竜仁とのやりとりから全部説明した、でも電話では断られた筈だった。

「でも、どうして?」

「ああ?文句言つなら行かんぞ?ドジ(ぢ)りらが」

ドジ(ぢ)りら??

「い、いや、来てよ!いや、来て下さい!」

どういふ訳か昨日の事を了承してくれたみたいだ、しかもちゃんと

彼女候補を演じてくれる気らしい。  
何としてでも連れて帰らねば！

「まあいいやん、行ってやるから、さっさと漕がんかい下僕！」

「サーイエツサー！」

「…アホかい…」

## 第五話 下僕初休日2

駅から自転車で二十分、住宅街の一画にある我が家到着。

最寄り駅から離れてはいるが家はデカイ。

家族三人で住むには広すぎる部屋数と無意味な庭がある家だ。

「さあさあ、どうぞどうぞ」

自転車を停めて、八神を玄関に即す。

緊張しているのだろうか？八神は黙っていそいそ着いてくる。

「二人供居るから作戦通りに頼むぞ？」

玄関の扉に手を掛ながら後ろに控える八神に確認する。

二人というのは、もちろん母さんと竜仁の事だ。

「解つとるわ、ヘタレうなぎが」

ヘタレうなぎ？

それはともかく、作戦とはこうだ。

八神はケンジの友達の友達、その間の友達の紹介で俺に紹介されたという事になった。

ちなみに竜仁も母さんもケンジを知ってる。

そして俺は既に八神に告白済みで、八神は俺といるいる遊んで親睦を深めてから返事をするという段階であるという設定である。

自転車でここまで来る道中、後ろの八神にこの作戦を聞かせたのだが…『あ〜』とか『へえ〜』とかどことなく信用出来ない返事を返してくるだけだった八神に少し不安になってきてしまう。

まあ後には退けないので玄関の扉を開ける。

「ただいま〜」

微妙に広い玄関に木霊する俺の声。

玄関には母さんの趣味であるフラワーポットが並び、パツパカパンと歓迎してくれる。

「リュウちゃん〜ん、おかえりなさい〜」

リビングからはこぼこスリッパを鳴らして出てきた母さん、八神のお母さんに負けない位にほんわかオーラを放出していた。

「か、母さん、そんなにはしゃがないで…」

八神の手前もあり、元気いっぱいの少女の様に陽気な母さんに突っ込まずにはいられない。

「何よお、リュウちゃん冷たい…って、あら、あなたがリュウちゃんの彼女さんね？」

どんな時でも笑顔を絶やさない母さん、俺の後ろに立つ八神を見つけると表情が更に華やぐ…母親に思えない位に若々しい…とてもじゃないが、今年で四十路を迎える人には見えない。八神のお母さんもいい勝負だと思う。

「…こんちは…まだあたし…コイツの彼女じゃないです…」

俺に隠れる様に母さんに反論する八神…

実際その通りである。

八神の反論ももつともだが、俺は八神の反応に興味深々だった。

自分の母親と違うほんわかオーラにやられたのか、もじもじと恐縮する八神は新鮮である……

否…

はつきり言っただけか…

「さあ、玄関で立ち話も何ですからこちらへどうぞ?」

八神をリビングへ案内しようとする母さん…

世の皆様はどうか解らないが、息子が初めて連れて来た女の子を母親がリビングに案内するというのはどうなのだろうか……?

八神を見つめる。

やはり緊張した様子でなんとなく体を強張らせている…

うう…普段からのギャップからなのか…  
かわええ…

「あんだよ?何か間違ってるか?」

自分を凝視されているのに気が付いた八神が怪訝そうな顔で訊いてくる。

「い、いや…何か悪いな…って思って…母さん強引だから…」

取り繕った言葉だが一応本音。



「……そんな事ない…綺麗で…優しそうなお母さんだし……」

……

これも八神の本音だろう…

まだ八神とは少しの時間しか共有していないが、この手の嘘というか、他人の為に言葉を選ぶ様な人間ではない……

「…ありがとう…」

自然に感謝の言葉が洩れていた…

「…ん…何か言ったか…?」

俺の呟いた感謝が聞こえたのか聞こえていないのか、わざとらしく言う八神……

心の中でもう一度呟く…

ありがとう

そして…

河本家のリビングは異様だった。

応接セットのソファーに並ぶ俺達…

上座に母さん…その母さんの前のテーブルに向かい合う様に四人が座っている。俺と八神が並び…反対側には竜仁と連れの子だ……場の雰囲気は誘拐犯に身代金を要求され、娘の無事を祈る家族と刑事といったところだろうか…

表現は悪いが雰囲気はそれくらい殺伐としている。

「ほらほらあ、緊張しないの、みんなで自己紹介よあ」

ただ一人ほんわかオーラに守られた母さんはこの殺伐とした雰囲気をもともしない。

みんな示し合わせた様に疲れた反応を揃える。

「はい、まずはあ、リュウちゃんからどうぞ」

言いながら軽く握った様な右手を俺の前に持ってくる母さん、おそらく架空マイクのもりなのだろう…

まるで殺伐とした雰囲気を読めない突撃レポーターの様だ。

「俺…かよ…」

なんとなく一番手を予想していたが、げんなりしてしまう。

ニコニコと俺が喋りだすのを待っている母さんの周りでは冷めた視線のみんな。

俺は犯人からの電話の内容を伝える父親の様だ。

「あ…河本…竜…高二です…よろしくお願いします…」

……何だこれは……

自分の名前を名乗っただけなのに、みんなの冷ややかな視線がレベルアップした……  
くろう……つらい……

「はい、河本竜一さん、ご趣味はあ？」

突撃レポーター母さんの無慈悲な質問が続く。  
趣味って……

「……えーと……えーと……あれ……」

うわぁ……俺……趣味無いよ……どうしょ……どうしょ……

「おやおや……河本竜一さん……どうしましたか？」

まさか息子が無趣味だとは思わない母さんは俺のパニックが解らないらしい……  
みんなの冷ややかな視線が更にレベルアップしていく……  
非常につらい……

「……下僕活動……」

隣の八神がぼそりと呟いた。

「えっ？げぼく活動ですか？それはどんな活動ですか？」

意味が解っていないのか母さんが復唱して、意味を訊いてくる。

冷やかな視線は和らいたが、俺のつらさはレベルアップしていく。そんな状態の俺が説明出来る筈がない。

「…ボランティア活動の様なものです…」

再び八神の眩き。

「まあ！素晴らしいですね！河本竜一さん！」

合ってる様な間違ってる様な八神の回答を真に受けた母さんが目を輝かせて俺を絶賛する。

くろう、これ以上息子を貶めないで下さい…  
つらいよ…

隣の八神はふるふる笑いを堪えているし…

「さあさあ！続きましては、お隣の女の子に自己紹介して頂きましょう！どうぞ！」

架空マイクを八神に向ける突撃母さん。

笑いを堪えていた八神、顔を上げると何とも解りやすい困惑の表情だった。

どうにかしてくれ的な視線を俺に向ける。

「お名前はあ？」

120%場の雰囲気をお勘違いしている母さんは楽しそうに八神に突撃を続ける。

「…八神…棗…」

ぼそつと呟く八神。

「あれ〜、元気がないぞお〜、もう一回どうぞお〜！」

突撃母さんの猛攻が続く。

先ほどとは違い、ぷるぷる怒りを堪えているらしい八神が俺を睨みつけてくる。

あわわ…母さん…やめてくれ…

「八神棗！」

みんなには無く、俺に怒鳴りつける様に自己紹介する八神。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

条件反射で謝る俺。

「あらあら、とっても仲良しですね〜、リュウちゃんと同級生かなあ？」

仲良しに見えるのは激しく疑問だが、こくこくと頷く俺。

「それでは八神棗さん、好きな男の子のタイプはどんな子かなあ？」

な！何て事を訊いているんだ！母さん！

俺の時と質問違っし！無難に趣味で行こうよ！

ぶるぶるが加速する八神。  
怖！絶対捌け口は俺だし！

「特にありません！」

吐き捨てる様に回答する八神、やはり俺に怒鳴りつける様に言う。  
正面の二人は終始愕然としている。

「またまた、リュウちゃんみたいなタイプはあ？」

母さんの猛攻は止まらない。

回答したじゃん！

これ以上ほじくらないでくれ！  
怖いから！後が怖いから！本気で怖いから！

怒りが頂点に達したのか八神のぶるぶるが止まった。

何だ？

「ふ……却下です、こんな特徴が無いのが特徴の様な男はごめん  
被ります一緒に居ても面白くないし面白くないというか一緒に居ても  
存在を忘れてしまう様な気がします顔も微妙だし特別背が高い訳  
でもないし不法侵入するし人ん家で遠慮しないでご飯二回もお代わ  
りするし何かイタいですコイツ……」

みんな絶句……

流石に母さんも絶句……

俺は何だか泣けてきた…

嗚呼…俺の生きてきた十七年とちよつと…

何だったんだろう…

楽しかった思い出が走馬灯の様に駆け巡っている…

懐かしい友達達の顔が駆け巡っている…

うん、居た居た、こんなヤツも居たなあ…

………

「楽しかった修学旅行！」

俺は叫んでいた。

「は？な？どうした？下僕？」

俺を貶めた八神本人もびっくりしてる。

しかし俺の叫びは止まらない。

「悔しかった運動会！」

みんな俺にイタイ目を向けている。

母さんでさえ、おろおろとろたえている。

「みんながひとつになった文化祭！」

「わ！解った！ごめん！あたしが悪かった！そんな自分だけの卒業式をやらないでくれ！」

俺を掴んでがくがく揺さぶる八神。

「えっ？あれっ？俺は一体…？在校生達は？」

心底申し訳無さそうな八神がトリップ寸前の俺を救ってくれた。  
あぶないあぶない…危うく人生を卒業してしまうところだった……

「…ま、まあ…河本さんの魂の叫びも聞けましたし、後半戦に行つてみましょう」

何事も無かった様に次に繋げようとする母さん…

「では、続きましてはこちらの男の子に行ってみましょう」

俺を少し気遣いながら竜仁に架空マイクを向ける母さん。  
流石に先ほどまでの突撃的な勢いは無い。

「あ、ああ、えーと…河本竜仁です…中三です…」

終始愕然としていた竜仁がはっとして自己紹介する。

「はい、河本竜仁さん、好きな女の子のタイプは？」  
すんなり続ける母さん。

「はい、えーと、甘えてくれる子とか…好きです…」

「まあ！かわいい意見ですね」



母さんの言葉に恥ずかしそうにする竜仁。

「はい、続いてはたっちゃんのお隣の女の子です！どうぞおー！」

ん？竜仁終わり？

「は…はい、私は近藤エミです、竜君と同じ中三です…よろしくお願ひします」

中三には見えない位に大人っぽい女の子…ちょっと遊んでそうなコだけど（偏見）

「あらあら、礼儀正しくてかわいいですね、そうですね…では近藤さんには…特技を訊いてみましょうか？」

「はい、特技は…特技というか趣味かもしれないですがお菓子を作るのが好きでよくやります」

へえ…見た目と違って中々女の子らしいじゃないかい…

「うんうん、かわいらしいですね…さあ…自己紹介も無事終わりましたね」

……ん？

「今近藤さんの話に出ましたお菓子ですが、実は私、皆さんの為にフルーツケーキを作ったんです、それを頂いてもらいながらフリータイムといきましょう」

……えっ？

終わり？

驚いて八神を見ると、八神も釈然としない様子だった。

俺達の時は散々引っ張ったくせに…

フリータイム中…

俺はトイレに逃げ出していた。

「……はぁ……」

嘆息…

母さんのフリータイム宣言から、俺達は宣言通りにフリータイムとなった。

しかし…母さんのほんわかにはやられた竜仁達はケーキ談義に盛り上がっているし、八神は終始怒ってる様子だし…

八神に彼女候補を頼んで来てもらった方がいいが、母さんのお陰で何やらおかしなイベントになってしまっているし……

八神に申し訳ないのもあるけど、後々に八神に怒られるのがちよっ

とっらい…

「兄ちゃん」

トイレ脇の洗面所の鏡と睨めっこしていた俺に竜仁が声を掛けてきた。

「…竜仁か…何だかすごい事になったな…」

竜仁に対抗して八神を連れて来たのだが、この状況に疲れた意見を竜仁に洩らしてしまう。

「いや、兄ちゃんやるじゃん…八神先輩かわいいし、兄ちゃんにまんざらでも無いんじゃない？」

俺を氣遣ってか、竜仁がおかしな事を言う。

「はぁ？お前は気付いてるだろ？俺は八神の下僕なんだよ？」

もう投げやりな俺は竜仁に本音を洩らしていた。

「ははは、そうみたいだね、母さんの勘違いが面白かったよ……でも……やっぱり八神先輩はまんざらでも無いんだと思うよ？」

は？

何を言ってるんだ？

「バカ言ってるなで戻るぞ」

「頑張んなよ？兄ちゃん」

何をだよ…

竜仁と合コン中のトイレ会議の様な掛け合いを済ませてリビングに戻ろうとすると…

「うるさいんじゃない！ガキは黙っとれや！」

リビングから八神の罵声が聞こえてきた。

待て待て…俺はここに居るぞ？じゃあ誰を罵ってるんだ？

……想像……

……やっぱ…

慌ててリビングへの扉を開ける。

「ちびガキが調子乗んなや！あんなへタレなんぞに興味有るか！」

八神の口撃くちげを受けていたのは近藤さんだった。

今にも泣きそうな顔をしている。母さんはおたおたと右往左往していた。

「八神！何やってんだよ！」

とにかく止める。

「うっさいわ！エロぱんだが！」

エロばんだ？

どうしたってんだ…さっきまでは一応おとなしくしていたのに…

「エミ、何があつたの？」

竜仁が近藤さんをかばう様にしながら訊く。

「…いや、私、八神さんに竜君のお兄さんとドコまで行ってるか訊いただけで…」

「ドコって何処やん？コイツはあたしの下僕なんやん！しもべなんやん！パシリなんやん！体ていのいい遣いいっぱなんやん！」

グサグサグサ

「まあまあ…！」

母さんののほほんな驚き、更にイタイイタイ。

「竜君のお兄さん…泣いてますか？」

「兄ちゃん、しっかりしろ！」

嗚呼…

これは罰なのだろうか…体裁にこだわるばかりに八神に頼ってしまった罰なのだろうか…

ちよっと夢を見ただけじゃないか…毎日の様に弟ののろけ話を聞かされ…やっとこさケンジに紹介という所までこぎつけたんだ…

ちよつと見栄を張つただけじゃん…

しょうがないじゃん…

「しょうがないじゃんかあ！」

かあ…かあ…

しーん

みんな呆然…八神がまた申し訳無さそうな表情を寄越す。

「まあまあ、リュウちゃんは好きな女の子の為にやってる事なんだからいいじゃない…ね？」

………ん？

ほんわか母さんが変な事言ってる…

「えっ？………そうなの？」

軽く驚いた様な八神が訊いてくる。

いや、俺が訊きたい。

「………いや…えーと……」

どうしよう…ここで違つとか言つとまた怒り出すかもしれない…

でも……はっきり言って俺は八神が嫌いじゃない……ん？……って事は？

……

急速に恥ずかしくなってきた……！

顔が熱い！恥ずかしくてうつ向いてしまう。

「……お、おい……マジかよ……」

八神が呟く。

「い、いや……」

あわわ……否定出来ない……

真っ直ぐに俺を見る八神……

残りのみんなは生ぬるい視線を俺達に向けている。

恥ずかしい……！

……

「……どMなんだ……」

「「「は？」「」「」





どろろしてかって……ちっぽりりり……ママズだからっ

うわぁ……やだなぁ……

## 第六話 更なる厄災の始まり

授業中：教科は数学：静まり反る教室に教師が走らせるチヨークの音だけが響く。

皆静かに黒板を睨み、ノートに鉛筆やシャーペンを走らせる。

俺も同じ。

特に勉強に必死になっている訳ではないが、自分なりにやるべき事は解っているつもりだ。

授業。

俺のやるべき事にカウントされている項目だ。

静かにペンを走らせるクラスメイト達も俺と同じなのだろうか…

誰もが教師の書く数式を熱心に書き写している。

ぶるぶる…

ポケットの中から振動。

熱心に動かしていたシャーペンを置き、振動の発信源である携帯をポケットから取り出す。もちろん教師にもクラスメイト達にも解らない様に机に隠しながらだ。

新着メールあり。

携帯を開くとディスプレイには新しいメールの到着を知らせるメッセージが浮かんでいた。

その表示を見た俺の心がほわっと和らぐ。

開かなくても解る。

今は四時間目：昼休みを控えた授業中に来るメールなんて想像に容易い。

こんな非常識な時にメールを寄越すヤツなら尚更だ。

f r o m 八神棗

s u b

カフェオレ買つとけや

何とも解りやすい指令だった。

心の中で大きいため息をはいてやる。

しかし心に湧いた暖かい感情が俺を嬉しくさせる。

理不尽…

相手に自然とため息をはかせる様な理不尽…

俺の場合…異常なのだろうか…

ため息と同時に顔が綻んでしまう…授業中であるにも関わらず顔の筋肉が締まらない締まらない…

解ってる…

これは異常なんかじゃない。

緩んだ顔もそのままに返信する。

t o 河本竜一

s u b

イエッサー！

自分で送信しておいて虚しくなる。  
でも顔の綻びはそのまま……

俺は生粋のどMであると実感する。  
繰り返す日常でいい加減自嘲するのにも慣れてしまった。

送信者に対する綻びか自分自身への嘲笑か考えようとしたところで  
授業終了のチャイムが鳴り響いた。

「……はい、お疲れ様でした、授業はここまでです」

チャイムと同時に授業を終わりにしてくれる先生。  
非常に感謝である。

「河本君…授業中の携帯電話の使用はなるべくお控え下さいね？彼  
女ですか？」

ん？

「今まで河本君の授業態度は大変優秀であったので不問としますが、  
これからはお控え願いますね……」

お？

「では皆さん、次の授業までごきげんよう…」

そう言い残して教室を出て行く数学の美人教師徳川先生（28才独身）……

何とも言えない視線が俺に付き刺さっている。

「……ははは…」

笑いながら横歩きで教室の出入り口にスライドしていく。

「……ははは…」

もう一度乾いた笑いを残して教室を出る。

同時に全速力で購買へと駆ける。

俺は今まで何事に関しても無難に…全てが平穩無事に行けば良かった。

何事にも当たり障り無く…目立たない様に…目立たない様に…

中庭…

最近、俺はここで昼食を摂る。

「遅いわ！だあほ！」

『これ』と一緒に昼食を摂る為だ。

これとは目の前でふんぞり反っている女の事…

八神棗：

背中真ん中位まで伸ばした少しクセのある黒髪、150そこそこの身長にくせに出るとこはしっかり出てる。身長に比例する様に幼い顔立ちだが分類するなら間違い無く美少女だ、常に吊り上がった眉と目尻、引き絞ったへの字口が実にもつたいたい…まあ…それ以上難があるのは性格と口の悪さなただけ…

人に遣いパシリを頼んでおいて悪びれた様子は欠片も無い…

正に天上天下唯我独尊…自己中の神の様に君臨する我が校のカリスマダ（皮肉）

「あんじゃい…まさか売り切れてたとか言っつんじゃあんめ？」

そんな事はない、カフェオレはちゃんと俺の右手に納まっている。

「何でもないよ、ほれ」

買って来たカフェオレをくれてやりながら隣に座る。

コイツと出会って一ヶ月…コイツの下僕になって一ヶ月…

周りから注がれる奇異の視線にも慣れた。

八神の理不尽にも慣れた。

八神の毒舌にも慣れた…稀にグサリとくるけど…

八神が俺の家に来た時…母さんの問題発言のせいで告白してみた事を  
してしまったのだが…

当の八神は鈍いのか、思考がお子ちゃまなのか全くと言っていい程  
意識してくれない。

……正直、そんなのどうでも良かった。

それは……

「ここで食べようか？」

俺でも八神でもない第三者の声が俺の思考を中断する。

「私はどこでもいいよ」

そう言いながら二人の女生徒が俺達の居る中庭の芝生に入って来た。  
おそらく昼食を食べる所を探していたのだろう。

二人はニコニコと楽しそうに微笑んでいた。

「……あ……」

二人の微笑みが氷つく……

俺達を見て……

いや、八神を見て……

「……行く……」

一人がもう一人の手を引く、明らかに気分の悪そうな顔のもう一人は俺を一瞥してから中庭を出て行った。

もう一人の方の女生徒が最後に見せた表情は蔑み（さげすみ）だった。

八神を試してみる。

いつのまにか弁当を開けて昼食を始めていた。  
別段気にした様子は無い。

そう…

コイツ八神棗にはもう一つ特徴がある。

『全校生徒の嫌われ者』

一ヶ月、いつも一緒に居るが俺以外のヤツと会話をしているのを見た事が無い。

友達が居ないからだろう。

この性格のせいかな…それともみんなに嫌われる様な事をしたのか…



俺は知らない…

…知りたくなかった…

「…おめえ、弁当忘れてきたのか？」

「えっ？」

ぐるぐる思考を廻らす俺に八神の声が掛る。

「…ちよつと食うか？」

自分の弁当箱を俺に差し出してくる。

「い、いや、有るから！弁当有るから！」

慌てて自分の弁当を取り出して開ける。

「…あんだよ…有るなら早く食べんと昼休み終わんぞ？」

小さな子供をしつける母親の様な困った表情で言う。

「あ、ああ…」

コイツは…

稀にこの様なほのかな優しさを見せる時がある。

俗に言う『ツンデレ』には程遠いかもしれないが、俺に対する破壊力は凄まじい。

コイツが俺をどう思っているなんかよりも…

コイツに友達が居ない事よりも…

何より俺がコイツの側に居れるという事が一番重要だった。

放課後。

やはり日課となってしまうた八神の送り迎え。  
二人で駐輪場の俺の自転車を取りに行く。

「あんであたしも行かんといけんのや、おめえが取りに行って迎えに来いってのに、このへにゃペンギンが！」

へにゃペンギン？

ぶーたらごねる八神を引きずってだけど…

「まあまあ…」

いい加減慣れてきた俺は軽くあしらう。八神が必要以上に文句を言う時は別に怒ってはいない時だ、ただ言うだけというヤツである。

マイチャリの鍵を開け、帰宅準…送迎準備完了。

「いいぞ、さあ乗りたまえ」

「あん？」

おどけた俺の言葉を真に受ける八神…怖い…

「ご、ごめん…乗ってください…是非乗って頂きたいのです…」

途端に下手に出るヘタレ全快な俺…

実はこの八神の送迎を楽しみにしている俺はちょっと必死である。

八神と一緒に居れるというのはもちろんだが、それだけではない。

口では文句ばかり言う八神だが自転車の後ろに乗るとすっかりし  
がみついてくれるのだ。

それはそれは夢いっぱいなのである…

背中が！

ヘタレな俺が八神を感じる事が出来る貴重な時間なのだ！

ヘタレなのだからしょうがない…うん、しょうがない。

「違うわ！あんかチャリおかしいやん！」

「えっ？」

頭の中の馬鹿馬鹿しい思考を停止し、八神が言う自転車をしてみる…

……確かにおかしかった。

「……パンク？」

愛用の自転車の後輪が見事にパンクしていた。

「なんやん、整備不良やん！使えんな！ぽっちやりタヌキが！」

ぽっちやりタヌキ？

そんな筈無い…最低限の整備はしている…

八神の送迎を始めてからは尚更だった。

「ごめん…事務室に行つて空気入れを借りよう…」

釈然としないが仕方ない…このままでは帰るに帰れない…

事務室に行けば空気入れもあるし、簡単な修理道具もある。

「…しゃあない…さっさと行くやん」

煮えきらないまま二人で事務室に向かう。

この時にはさして気に留めなかった。

しかし、これは始まりに過ぎなかった……

俺は思い知る事になる……

俺達二人と全校生徒1500人との隔たりを痛感する事になる……

## 第七話 知らなければよかった事

一ヶ月半経った。

それは何でもない平日の日だった。

午前六時五十分起床。

制服に着替えて顔を洗って髪の毛をちよこちよこ整える、所要時間十分：男の朝の準備なんてこんなもんだ。

「おはよう、リュウちゃん」

リビングに行くと母さんが笑顔で向かえてくれる、この心からの笑顔を見られるだけで一日頑張れる気がする…というより、この笑顔を見ないと一日が始まった気がしない。

八神に会う前はもう三十分くらい寝ていたので最初はキツかったけど、最近はずっかり慣れてきてしまった。

覚醒しきらないまま食卓に座って、母さんの作ってくれたトーストにかぶりつく。河本家の朝食はパン党。

朝食と準備を済ませると、さっさと家を出る事にする。

「兄ちゃん、今日も早いなあ…毎日毎日よく続くね」

起きてきた竜仁に声を掛けられる。

中三のくせに髪の毛は濁りまくったグレー？竜仁曰く『そりっどあつしゅ』というものらしい…俺にはよく解らないが顔がほとんど同じの弟とモテるモテないの差が出るのは、どうやらそういう事らしい…

「もう完全にハマっちゃってるね」

にやにやと皮肉めいた事を言う竜仁、くそ生意気だが、何も言い返せない。兄として朝からやるせなくなる。

午前七時五十分。

清海電鉄清海線、久住ヶ丘駅。自転車を走らせその北口に到着。見るからにシヨボい駅前はロータリーすら無い。バス停に横たわるだけの駅前、その駅前を囲む様にいくつかの飲食店が軒をつらねている。

飲食店の一画にある『居酒屋はつみ』。俺の目的地はここ。

「あら河本さん、おはようございます」

今日二度目…いや二人目の心からの笑顔…

八神初美さん：八神のお母さんだ。

俺の母さんと同じ位の年齢だとは思って、どう見ても二十代にしか見えない…いつも和服を着ていて如何にも日本美人といった感じだろっか…

八神と知り合って一ヶ月…最近では母さんと同じくこの笑顔を見ないと言った気がしない。

「なっちゃん起きてるから呼んできますね」

そう言うと、せかせか呼びに行ってくれるお母さん…最近はお母さんの挨拶とこの役目の為にいつも店の前で待っていてくれる。

思えばこの人の為に八神に踏み込んだのが始まりだった…  
俺の母さんと同列かそれ以上の過保護の代表の様な八神のお母さん…  
あの時に俺が八神の友達を拒否していたと思うとゾツとする…この人の悲しい顔は母さんの悲しい顔と同じ位に見たくない。

「……………ねみ…」

しばらく待っていると、物凄い眠そうな八神が降りて来た。  
俺はとりあえず挨拶してやる。

「…ん…ああ…」

軽く一瞥しただけで、のそのそ俺の自転車の後ろに座る。  
何とも味気ない…しかしだ…よく考えてみると最初の頃は反応すら攻撃的だった八神が相槌を打つだけでも多大な進歩とは言えないか…  
…ポジティブだ、ポジティブで行こうじゃないか。

八神のお母さんに送り出された俺達は学校に向かう。

俺の自転車ママチャリでだ。もちろん運転は俺、後ろの荷台には八神。

八神は眠いのか、完全に俺の背中に身を預けている。一応手を回して俺にしがみついているみたいだが、後ろからはおもいっきり寝



息が聞こえてくる。

はつきり言つて危ない。まあかなりのんびり走つても間に合う時間なので俺が気を付ければ大丈夫だろう………というより、この完全密着体制を早々に逃してしまふのは実にもつたないのが……いや、何でも無い……聞かなかつた事にしてほしい………すいませんした。

午前八時十五分……学校到着。

徒歩の生徒達をすり抜けて駐輪場に向かう。

ちなみにこの時、俺は自転車を降りている、朝一から二人乗りで校内に突入したら風紀委員がすつとんで来る。

という訳で俺は自転車を押している訳だが、八神は荷台に乗つたまま……

器用に寝たままでバランスを取っている……仕方ないので駐輪場にご招待する事にした。

しかししかし……

最近は毎日だが、学校に入るとどうも気分が落ちる……

周りからの視線……俺に向けられてるのか八神に向けられてる解らないが、どの視線もいい視線では無い……

良い悪いのでいえば間違いない悪い視線……奇異の視線……非難の視線……軽蔑の視線……同情の視線……嘲笑の視線……

たまつたもんじゃない……

駐輪場に到着。さつさと八神を起こして教室に向かわないと遅刻になつてしまつ。

揺さぶって起こしてみる。

「…………んああ！うっざい！うっざいわ！たわし亀の子が！」

たわし亀の子？

亀の子たわし？

ぺって手を叩かれて睨まれる。俺は何とも言えない脱力感に襲われる…まあ毎日の事だけど。

気にしたら負けだ…気にしたら負けだ…

「あに、ぶつぶつ言ってんやん、行くぞ？下僕」

非難めいた顔しながらすたすた先に行ってしまうご主人…慌てて着いて行く俺。

嗚呼…身も心も染まってきた気がする。

午前八時二十五分…予鈴。

クラスの違う八神と別れ、自分のクラスに入る。

俺が教室に入ると、みんなの雑談が止まる。誰もが空気を変えた俺と目を合わせようとしない。

疎外感……

今までなら誰かしらが挨拶をしてくれたのに…

最初の頃は俺をかばう様にしてくれていたクラスメイト達…今では俺も八神と同じく疎外する様になっていた。

「よお、おはよう」

でもケンジだけは違った。いつも通りに挨拶をしてくれる。元々特に仲のよかったのはケンジだけ。クラスの連中とは挨拶を交す程度だった。

でも不意に襲った疎外感は堪えがたい苦痛だった。

八神がいつも一人で受けてきたものだ。八神の為を思うと八神から離れるのは絶対に嫌だとは思う…でもケンジが居なければ俺はくじけていたかもしれない。

ケンジは要領が良いので疎まれてる俺と仲良くしていても周りからのやつかみを上手くかわしているみたいだ。とてもじゃないが俺には真似出来ない。まあ俺のせいで…っていう不安は無くて助かるけど。

「何だよ…元気無いな？八神と喧嘩したのか？」

少しふてり気味に俺が挨拶を返すと、ケンジはにやにやと俺をからかおうとする。本当に今まで通り…クラス全員に疎まれたとしても心が暖かくなれた。

気持ちを切り替えて俺もいつも通りにおどける。

周りの視線は気になったが、そんなのはどうでもよくなった。

午後十二時二十分、昼休み。

俺は授業終了と同時に購買に駆け込み、カフェオレとレモンティーを購入。急いで中庭に向かう。

もちろん八神と昼食を摂る為だ。

「何やん、ハアハアしてキモいな」

急いで来たお陰で息を切らしている俺に本気で嫌そうな顔で言う八神。遅いと怒るくせに…と心の中でだけ反抗して隣に座る。

買って来たカフェオレを渡してやると嬉しそうに飲み始める八神…米メインの弁当にはまず合わないと思うのだが、八神の飲み物は絶対カフェオレだった。機嫌が悪い時も買ってやるとすぐに機嫌を直してくれる。よっぽど好きらしい…

一二年校舎、三年校舎、特別棟、部室棟に囲まれた中庭。その中庭の中にある植え込みに囲まれた芝生…そこが俺達の指定席になっていた。

噂が広まったのか誰も近付かない…完全に腫れ物扱いだ。

…別に構わない…

ってというか邪魔すんなって感じた。

午後三時三十分…学校終了。

ケンジに挨拶をして急いで教室を出た俺は二年J組、そのプレートの教室の前で待機する。八神を待つ為である。

わらわらとJ組から出てくる八神のクラスメイト。部活に行くヤツ帰るヤツ…みんな俺を一瞥していく…みんな朝と同じ様な視線だった。

しばらく待ってみるが八神が出て来ない…

気になって覗いてみると八神は一人で掃除をしていた。

「ああ、下僕かい…今日あたし掃除当番なんやん…ちっと待っとけ

や

そういつも通りの口調で言う八神だが、どことなく寂しそうだった。大体おかしい…

通常なら掃除当番は4〜5人でやる筈だ、決して一人でやるものではない。

「…知らんわ…帰ったんやん？」

訊いてみると、興味無さそうにぼやく。

どうやら八神が受ける疎外は俺の比では無いようである。

「…ほう、いいやんいいやん。じゃあ頼むわ！」

俺が手伝いを申し出るとにやりと顔を緩ませる八神…そのまま『じやっ！よろしく！』って感じで教室を出て行こうとする。

「ぷっ…ふははは！冗談やん、ごめんごめん」

俺が慌てて追いすぎると、おどけてからかう八神。

……ああ……

ずるい…その笑顔はずるい…かわいすぎる！

そうだ、俺は八神と一緒に居てくれればいい。

それだけでいい。

午後四時二十分、再び駅前の八神宅到着。

「…おい、ちつと寄ってけや」

ん？

「茶くらい出してやつから寄ってけや」

驚いた。八神のお母さんを介してお邪魔した事は多いが、八神本人から誘われるのはかなり珍しかった。

「…おめえ勘違いすんなよ…ちつとした礼やん…ほら、掃除の礼やん」

お礼ときた。あの天上天下唯我独尊八神棗がお礼ときた。

いやはや、俺の日頃の努力の成果だろうか…最近の八神は和らいできた節がある。いや言葉遣いやジャイオン振りは相変わらずなのだが、俺に対しての扱いが向上したというか人間扱いしてくれるとうか…

「あにぶつぶつ言ってた？用事あんのか？」

近かった。非常に近かった。いつかの嫌そうな顔ではなく、本当に俺を気遣ったの表情だった。その八神の顔が非常に近かった。

俺は超高速で飛び退いて高速で首を横に振る。もちろん予定なんか無いからだ、あつたとしてもそんなもん全快でキャンセルしてやる。

午後四時三十五分…棗の部屋。

入るのは二回目…でも前回に入った時とは違う。

前回はお母さんに無理矢理連れて来られたが、今回は部屋の主に連

れて来られた。

この違いは凄まじい。

やはり日頃の成果は実を結びつつあるのだろうか。

「ほれ、おめえは紅茶でよかったか？」

お茶を入れてきてくれた八神…待っていた俺を気遣ってくれた。

…おお…これは何のイベントだ？いつフラグが立ったんだ？

「お母さんには来ない様に言っただけだからから気遣うなや」

！！？

何て事だ！やはり何らかのイベントらしい…

ドキドキしてきた。ヤバい！ヤバいぞ！

「それ飲み終わったら、これ頼むわ」

ドスツとテーブルの上に何かの束が置かれた。

「たまった課題」

さも当然の横に言う八神…  
課題？

「あたしは店の手伝いしてくっから頼んだ」

意味が解らなくてぼおっとしてみるとあっさり部屋を出て行って

しまった…掃除の時の様に冗談だと思っていたら今度はマジらしい。  
やたらとファンシーな部屋に取り残される俺。目の前には積み重ねた  
課題…紅茶のカップと同じ位の高さだ。

大したイベントだった。

午後七時。

俺はぐったりしていた。

何とか消化してはいるが、課題はまだ半分も減ってない。

げんなりしながらもやってしまうのは下僕だから？八神の頼みだから？

……まあ後者だろう。

下からはお客の笑い声がたびたび聞こえてくる。やるせなくはなるが苦痛ではなかった。

精神的には苦痛ではなかったが長い時間座りっぱなしだったから肉体的にしんどくなってきた。

休憩も兼ねて少し体を動かす事にした。立ち上がり見回してみる。

……何とも落ち着かなかった。

廊下に出る事にした。

ぐいぐい体をほぐしていると、廊下の奥に目が行った。

八神の部屋の隣…

何故だか嫌に気になった。



お母さんの部屋では無いと思う…八神の部屋とお揃いのプレートが掛っていたからだ。

八神の部屋には『棗』と…

隣の部屋には『菖』……

「……あやめ？」

静かな廊下に俺の咳きが響く。

姉妹？まず浮かんだのはその言葉だった。

しかし一ヶ月以上八神と過ごしているが、その様な存在の影は無かった。解らない…本当に気になった訳では無い。

でも俺は自然と扉を開いていた。

## 第八話 菖と棗

扉の向こうは暗く、埃の匂いがした。

手探りでスイッチを探して明かりをつける。

……女の子の部屋だった。

間取りは八神の部屋と同じ。ベッドと机の配置も同じ。  
ピンク主体の八神の部屋に対してこの部屋は水色主体だった。八神の部屋に負けない位にパステル全快だった。

……部屋の主は居なかった。

俺はどうしようも無い程の寂しさを感じた。

ベッド…綺麗に整えられた布団…しわ一つ無い。

机…丁寧に整頓された教科書や文庫本…学生の様だった。

八神の部屋より少ないぬいぐるみもカーテンもじゅうたんもテープルも……

どれを見ても寂しかった…

綺麗に整頓されてはいる、綺麗過ぎるくらいだ。

しかし人の温もりが無かった、映画のセットみたいに『置かれた』だけ…ここにある全ての物の持ち主は居ない…

染み付いた埃の匂いがそれを物語っていた。

机の上に置かれた写真立て…吸い込まれる様にそれを取る。

八神が居た。八神のお母さんが居た。

もう一人…八神が居た。

入学式だろうか…見覚えのある正門が写っていた。

八神も…もう一人の八神も…制服を着ていた。

俺達の学校、久住ヶ丘高校の制服を着ていた。

笑顔のお母さんを挟み、二人の八神が同じ顔で笑っていた。

三人供幸せそうな笑顔だった。

でも……

何故か寂しい写真だった。

「おい！何やってんだよ！」

部屋の入り口から怒声が響く。八神だ。

驚いて振り向いた俺の手から写真を奪い取る八神。

「…八神…この…部屋は？」

「うるせえ！出る！出てけ！今すぐ出ていけえ！」

金切り声を上げる八神、目に涙を溜めていた。  
初めて見た八神の涙だった。

押し出される様に部屋から追い出されてしまった。

「や、八神！」

あまりに唐突な八神の激昂に俺は着いて行けない。

「黙れ！帰れ！今すぐ帰れよお！」

八神の涙は溢れていた。

ぼろぼろと涙を溢しながら階下への階段に押し出してくる。

「待つてよ！八神！話を訊かせてよ！」

解らない事だらけで頭が全く着いて行けない。

この激しい八神の怒りの理由を知たかった。

「喋んな…よお！訊くな…よお！…嫌…だよお！」

かなりの興奮状態の八神…苦しそうに顔を歪めている。いやいやと  
我が儘を言う小さな子供の様に泣き叫んでいる。

…結局、俺は八神の家から追い出されてしまった。

鍵を閉められ、携帯にも出てくれない。

店の方から入るのも躊躇われた。  
仕方なく家に帰る事にする…

帰る道中…漕ぐ気力も無く、自転車を押しながら考える。

菖…

八神菖…

八神の双子の姉妹…

…間違いないだろう…

そして、あの部屋…八神の反応…

……………

八神菖はすでにこの世に居ない…

こんな推測は間違っているとは思いますが、そうとしか思えない。

取り乱し、癪癢を起こしてしまった様に激しく怒っていた八神…  
部屋に勝手に入ったのは悪いと思う。しかし八神が怒った理由はそ  
れだけではない…

俺は踏み込んではいけない領域を侵してしまったんだと思う…

酷く…後悔した…

翌日。いつもの様に八神を迎えに来ていた。

八神の家の前、やはりいつもの様に八神のお母さんが待っていてくれた。

少し安心した。

「おはようございます」

なるべく明るいい声でお母さんに挨拶をする。

「あっ…河本さん、おはようございます」

俺の声にはっとした様に挨拶を反してくれるお母さん。

「河本さん、なっちゃんとうんざりか何かしました？なっちゃん先に行っちゃったみたいなんです」

困った様な不安そうなどちらとも取れない様な顔で言う。

「えっ？」

「昨日もずっと機嫌が悪くて…何か知っていますか？」

何てこった…

謝らせてもくれないつもりだろうか…

どうする？お母さんに昔の事を訊いてみるか？  
それとも八神から訊くべきなのか？

……

無理だ…訊ける筈ない…

「…えっと…ちょっと怒らせちゃったみたいで…すみません…」

全てが俺の推測…実際どうなのかは解らない…

しかし俺は八神の領域を侵してしまった。八神を傷付けてしまった。  
友達なのに…初めて出来た好きな女の子なのに…

浅はかな発言をしてお母さんも傷付ける訳にはいかない。

「そうなんですか…ふふふ…なっちゃん強情だから大変ですよ」

微笑ましく受け取ってくれたのか、ほわりと微笑むお母さん。

良かった…

そして学校…

俺は昼休みまで待ってJ組に来ていた。

俺に嫌な視線を寄越すJ組の生徒を縫って八神の席に行く。

八神は机に突っ伏していた。

寝ているのか？

「…八神…八神？」

恐る恐る声を掛けてみる。

反応は無かった。少し声を大きくしても同じだった。

俺の声を聞いてか、周りの視線が集まっている。

まるで汚物でも見る様な酷い視線だった…昼休みの為か教室には半分位の生徒しか残っていなかったが全員が冷たい視線を向けてくる。『よそでやれよ』『飯が不味くなる』『迷惑だっけ解れよ』『ってどうか学校辞めろよ』

実際どう思っているかなんて解らないが、誰もが眉をひそめてひそひそと俺達の事を話している様な話し声…恐らく的は射ていると思う。

同じ歳のクラスメイトにここまで酷い仕打をしてしまうものなのだろうか…

居た堪れなくなった。不安で教室に居る全員が怖くなった。



「八神！起きてくれ！」

不安と恐怖で押し潰されそうになり、八神を揺り動かしながら声を荒げる。

「……やめるや……」

「えっ？」

起きてくれたらしい八神の咳きは久しぶりに聞いたドスの効いた声だった。

一瞬安心したが軽く呆気に取られてしまう。

「触んなや！ウザいんじゃ！おめえはよ！」

八神の叫声。

俺を含めた教室の全員が啞然としてしまう。

「おめえ！さつきから慣れ慣れしいんだよ！面倒くせえヤツがあたしに気安く触ってんじゃねえよ！いい加減キモいんだよ！」

地獄に落とされた気がした。

激昂する八神は俺を罵るばかりではなく、親の仇でも見る様に目を血走らせている。

「や、八神？」

「気安く呼ぶなや！いい加減ウザいって言ってるだろが！マザコン！」

「な！」

八神の言葉が俺を射抜く。

静まっていた教室にざわめきが戻る。

ひそひそと俺の陰口を囁く声が聞こえる。

自分の教室で感じたそれよりも、先ほど感じたそれよりも…大きな孤独感に襲われた。

怒りは無かった。

ただ…悲しかった。

確かに八神は口が悪かった。…でも八神の言葉で本当に傷付いた事なんて無かった。びっくりしたり苦笑する事はあっても傷付いた事は無かった。

さっきの言葉はきつかった…

別に自覚してるし、特別恥だとは思わない。  
けど八神の口からは聞きたくなかった…

だから…悲しかった…

「何やん…その目は…あたしの事好きなんじゃなかったのかい……  
は！幻滅したかい？ざまあないね！ははは！」

追い討ちを掛ける様に俺を罵る八神…

「くくあゝ！気分悪いわ！おめえが消えないんならあたしが消えるわ！」

八神は荒々しく立ち上がるとすたすた教室から出て行ってしまった。

取り残された俺…

周りからはなおも続く俺を罵る囁き声…

俺はもう崩れ落ちそうだった…

夜…

あの後。俺は無気力のまま残りの学校を消化し、放心状態のまま、  
自宅に帰り着いた。

母さんの作ってくれた夕食も喉を通らず部屋に引き込もっていた。

時間が経っても気分は少しも回復してくれなかった。恥とか外聞と  
か怒りとか明日の心配なんてどうでもよかった……

ただ…悲しいだけだった…

ピリリリリ

静かな部屋に響く電子音。

俺の携帯が鳴っているらしい…

八神の顔がちらつく…

気だるいまま携帯を開く。

着信 杉山剣二

ケンジだった。

「……………もしもし……………」

無視したいとも思ったが自然と通話ボタンを押してしまっていた。  
ケンジの声が聞きたかったのかもしれない。

『リュウ…聞いたぞ…何かJ組で凄い事になっちゃったらしいじゃないか…』

俺を気遣う様にケンジの声は和らかい…

少しでも救われた気がした。

『お前には違うと思っていたんだけどな…』

???

「…どういう事だよ？」

『八神の事だよ…』

八神の事？

『前にも言っただろう？八神は全校生徒の嫌われ者だって…八神の噂はいろいろ聞いていたけどさ、はたからお前と八神を見てるとお前には対しては違つかないよ…思っていたんだけどな…』

「…なあ…八神はどうしてそんな『全校生徒の嫌われ者』なんてものになっちゃったんだ？」

理由がある…それは間違い無いと思う。

ただ性格が悪いだけで全校にまで噂が広まる筈がない。

正直知りたくはなかった…

でも今日の事があって俺は八神が少し信じられなくなってしまったのかもしれない…

理由が欲しかった。

『…俺も噂で聞いた程度なんだけどな…』

やはりケンジは知ってるらしい…

俺が余りにも疎かったため知らなかっただけで恐らく全校の生徒達のほとんどが知ってる事なのかもしれない…

『八神には双子の姉が居たんだよ…』

やっぱり…

俺の思ってた通りだ…

そして『居た』…過去形…

これも…

『八神姉妹は一緒にクズ校に入学してきた…美人の双子ってかなり有名だったんだ。元気で明るい姉の菖…静かでおとなしい棗…二人供かわいくて全校でも凄い噂だったんだぞ』

全然知らなかった…

ってというか八神が静かでおとなしい？

『まあお前は知らなかっただろうけどな…俺はわざわざ見物に行ったりして何度か姉妹揃った所を見た事があるぞ。いつでも二人一緒に居て確かに見ているだけで癒されちまう様な二人だった』

「……………菖はどうして？」

どうしても気になってしまつのはそこだった。

『……………交通事故だ…下校途中に車に撥ねられたらしい…去年の今頃だったと思う…棗も一緒だったらしいけど棗は無傷だったらしい…』

「……………」

言葉が無かった…

八神がちらつく…八神のお母さんがちらつく…あの部屋がちらつく…

『結局…菫は助からなかったんだが…問題はその後なんだ…』

???

何だ？話してくれようとしているケンジには悪いが…

聞いてはいけない気がする…

『酷かったらしい…菫の為にみんなでした黙祷中に笑いだしたり…誰も悲しんでいる中で一人元気にはしゃいでいたりしたらしい…』

「…えっ？」

『おとなしかった棗と違って元気だった菫は友達が多かったらしい…みんな悲しんでいたらしい…けど棗は泣いているヤツを見付けては罵ったりしたらしい…』

「そんな筈あるか！八神がそんな事する筈ねえだろ！」

俺は叫んでいた。ケンジの話が信じられなかった。

『…本当らしいよ…現に今八神が嫌われているのが何よりの証拠だ…』

冷静に…俺に言い聞かせる様に言うケンジ…

「…そんな…」

『話を戻すと…八神が嫌われた理由ってのは…全部昔の友達が広めたものなんだ…姉妹なのに酷い…亡くなった人に何て事を言うんだ…人の心が無いのか…みんな口々に八神を嫌う様になったんだ…』

「…八神…」

俺は納得してしまっていた。

八神をかばう言葉が出てこない…

『…あの性格も合まって今じゃ全校生徒の嫌われ者って訳だ…』

「…ケンジ…俺は…」

今となっては俺にはケンジしか居なくなってしまった…

情けない声でケンジにすがってしまう。

『…大丈夫だよ…お前が八神みたいに嫌われたとしても、俺はお前の友達は絶対にやめない。っていうかお前が嫌われる理由なんか一つも無いぞ?』

「…ケンジ…」

俺の親友は最高のヤツだった。

『とにかく…切り替えるよ?俺がいくらでもフォローしてやるから明日もしっかり学校来い!いいな?』



「…うん」

じゃあ明日と挨拶を交して電話を切る。

………

ケンジには感謝で一杯だった。

納得できたと思う…

でも…

俺は一つだけ引っ掛かっていた…

……… 八神の涙だった…

昔の部屋から追い出された時に見た八神の涙…

あれはケンジの話していた事に全く結びつかない………

泣いていた八神の顔がちらつく……

……八神に会いたかった……

## 第九話 晒者から晒者へ

俺は逃げ出していた。

少し前。続けて来たた日常のお陰で早起きをしてしまった俺は日課通り朝食を摂っていた。

しかし何も知らない母さんと一緒に居るのも嫌で、起きてくる竜仁と顔を合わせるのも嫌だった。

結局、いつも通りの時間に家を出てしまった。時間が空いたのもあり、ケンジが登校前の学校に行くのも躊躇われた。

… 駅前に行く事にした。

八神を迎えに行く為ではない。恐らく八神に嫌われてしまった俺は八神の送迎は出来ない。… いや、させてもらえないだろう。

それでも駅前の八神の家が気になったのは、八神のお母さんが気になったからだ。お母さんは何も知らないだろう… 間違い無く心配しまくるであろうお母さんに八神が俺との事を洩らすとは思えない。その何も知らないお母さんは今日も待つてくれているのではなからうか… そう思つて自転車を駅前の八神の家に走らせていた。

やはりお母さんは居た。

前日と同じ様に店の前で佇んでいた。

不安そうな困った様な面持ち、少し伏し目がちで元気が無さそうだった。

気が付くと俺は逃げる様に自転車を走らせていたんだ。

そして自己嫌悪。

自分が最低で嫌なヤツだと痛感する。

お母さんが気になったからなんて建前だ…

心のどこかで期待していたんだ。

もしかしたら八神の機嫌が直っているかもしれない…また一緒に登校してくれるかもしれない…

それをお母さんの表情で確認したんだ、俺は。

八神はすでに学校に行つてしまつているだろう。

俺と会いたくないからだ。

学校に行きたくなかった。

しかしケンジと約束してしまつたし、俺は今までさぼりなんかした事が無い。

結局、気分を更に落としたまま、学校に向かうしかなかった。

見慣れた教室を前にして、足を止めてしまつ。

学校に着き、教室に来る迄の間も学校中の生徒達の視線が俺を射抜いてきた。知っているのか知らないのか、誰もが俺を苛む様に攻撃的だった…など馬鹿な事ばかり考えてしまつ。被害妄想も甚だしい…自分が如何に弱い人間であつたと落ち込みそつだ。

「おはよう…」

「痛って！」

バシンと背中を叩かれながら声を掛けられた。  
痛い！

「来たのはいいけど、凄まじいネガティブ放出してんな！ほらほら俺が慰めてやつから！」

ぐりぐりと髪の毛をかきまわされる。はっきり言ってウザイ以外の何者でもないが、嬉しくなった。

「…あれ？嫌がなんいの？」

為すがままの俺を不思議に思ったかケンジが動きを止めて怪訝そうに俺を窺う。

「げっ！」

「げっ？」

俺の顔を見たケンジが凄く嫌そうな顔で驚いている。

?????

「お、お前、やっぱりMだな…あんな事したのにニヤけまくんなよ…」

「えっ？マジで？」

どっちらニヤけてしまっていたらしい…

「くくっ！ははは！ほら教室入んぞ」

ぐいぐい教室に連行されてしまった。

そして、驚いた。

「よお！河本！大変だったな！」

「聞いたよ、河本やっぱり被害者だったんじゃない」

「だよなあ、だいたい河本が八神と一緒に居るのはおかしいと思っ  
てたんだ」

「河本君、見た目に騙されちゃった口だったんだね、純情純情！」

何だこれは？

もちろん驚いたが、それ以上に訳が分からなかった。

俺の頭がおかしいのか？

自分の考え方が間違っているのだろうか？  
少し不安になってケンジを見る。

ケンジは苦笑しながら肩をすくめていた。

『相手にするな、流せ』

俺を気遣う様な表情がそう言っている気がした。

「元気出せよ！振られたっても八神はちょっとおかしいんだよ」

時間が止まった。

「……………」

クラスメイトの一人が何気無く言った言葉。

俺は拳を握り締めていた。

奥歯を噛み締めていた。

俺の意識がソイツに集中する。

「よーし！話は終わり！そろそろ先生来るぞ！ほら後にして席に着こうぜ！」

殴り掛ろうとした俺の肩に腕を回しながらケンジがおどけた様に言う。

はっとした…危なかった。

俺は何て事をしようとしていたんだ…人を殴った事も無いくせに…俺が標的にしていたヤツは既に自分の席に行ってしまった。

「堪える…言いたい事があるなら俺が聴いてやるから…」

肩口でケンジが囁く。  
ケンジの声で少し冷静さを取り戻すが、腹の底に何かが渦巻いてい  
た。

俺はどうにかしちゃったのだろうか…？

あれほど酷い事を言われた八神なのに…

その日は一日中辛かった。

ケンジは別だったけど、会うヤツ全員が煩わしかった。

相変わらず嫌な視線を寄越すヤツ。

掌を返した様に俺を気遣ってくるヤツ。

関わりが薄く無関係なヤツでさえも…煩わしかった…

平和だった日常が嫌に懐かしい。

「もつどうしようも無い位に廃人だな…」



放課後、どうにもこうにもどうしようも無く机に突っ伏す俺にケンジが呟く。

相槌を打つ気力も無く、視線をケンジに向ける気力も無い。今日一日が酷く長く感じた。帰るのも億劫だった。

「俺は噂でしか八神の事を知らない。お前に何を言ったのかも詳しくは知らない。だから何も言わないけど……まあ、その、なんだ、元氣出せ」

多分、それしか言葉が見付からないのだろう。でも俺の事を気遣ってくれるケンジの言葉が嬉しかった。突っ伏していた顔を上げ、どうにかケンジに視線を向ける。

「悪いな……切り替えないといけないよな……」

まだ無理だと思う。八神：八神のお母さん……最近は本当に楽しかった。

今までの俺の生活からすれば、毎日が刺激的だった。毎日女の子と一緒に過ごしたというのはもちろんだが、今まで会った事も無い位の自己中……八神は俺に無いものを全て持っていた。

周りの顔色ばかり窺っていた俺：自分の意見なんて二の次……周りに噂されるのが怖くて目立った事なんてできなかった。

俺は八神に憧れていたのかもしれない。

「……………」

何か言いたかったが言葉は出なかった。

俺が何か言おうとしたのに気付いたのかケンジは待っている。

分からない…

俺は何を言いたいんだろうか？

「…リュウ…お前…諦めるのか？」

???

何を？

………

違う…

もう周りに合わせるのは止めよう。自分の思った事を信じなくちゃいけない。

諦める。

そう訊いて頭に浮かぶ事は一つだ。

嫌に頭の中がすっきりした。

「…嫌だ」

みっともない…

「嫌だ…」

女々しい。

「…諦めたくない…」

情けないと思う…

でも…

「だろうな…リュウならそう言うと思った」

ケンジは笑顔だった。

嘲笑でも苦笑でもない。

安心した様に笑っていた。

「…お前がこのまま、八神から離れるならそれでも良かった…でも諦めないって言うなら、協力する」

「…ケンジ…どうして…?」

ケンジは親友だ。ケンジもそう思ってくれてると思う。

でも、いくら親友だからって、こんな女々しいだけの他人の恋愛に干渉してくれるのが疑問だった。

「やっぱりそう思う?…うーん…お前ならいいか…」

????

「俺さ、姉ちゃんが居たんだよ…」

「えっ?」

知らなかった。ケンジとは、かなり付き合いが長いが知らなかった。

「居たっていうか今も何処かに居るんだろうけど、もう五、六年会ってない…いや、会っちゃいけないんだ」

「…ケンジ、意味が分かんないよ」

「俺の家って複雑なんだ、深くは訊かないでくれ。簡単に言ったらその複雑な家の事情で離れ離れになったんだ…で、その姉ちゃんなんだけど、姉ちゃん…俺を探してくれてるらしい…」

話の内容の様に複雑そうに顔を歪めるケンジ。

「昔は厳しいだけの姉ちゃんだったけど、居なくなると寂しかったんだ。探してくれてるって聞いた時は嬉しかったんだ。長い間一緒に居た家族が居なくなっって辛かったんだ…」

「……ケンジ」

「…八神もそうじゃないかな？」

「……………」

八神と一緒に居たのは一ヶ月半…

毎日一緒に居たが八神が自分の事を話した事なんて無かった。機嫌のいい時は饒舌に話してくれた事もあった。

でも、八神は不思議な位に自分の事を話さなかった。  
アイツの姉、菖の事を俺は知らない。  
どんな姉妹だったのか知らない。  
菖が生きていた時の事を知らない。

でも、そうだと思う。

何故だか納得出来た。

「俺さ、ちゃんと試してみる」

『言う』…もちろん告白するって事だ。  
振られた方がいい。

でもこのままなんて絶対に御免だ。

「…そうか…頑張れ」

しょうがねえヤツだなあ…って顔。  
いつも通り過ぎて、逆にやる気になれる。

今の俺は今までと違うから…

何を根拠に自信があるのか分からない…

でも、どんな理由にしろ八神に会う口実が出来た事が嬉しかった。

俺を変えてくれた八神…

罵られるのは分かってるけど俺の気持ちは全部聞かせてやる。

心が軽い。

憂鬱な気持ちは晴れ渡っていた。

## 第十話 下僕再出発

目覚めは快適だった。

事實はどうであれ、自分で勘繰って自分で落ち込んでいたのだから、その考えをもっと前向きに考えれば気持ちも軽くなるのも当然だった。

そうだ。

今までの俺：他人に合わせてばかりだった俺：

今日は違う。

八神に合わせてなんかやらない。

「おはよう母さん」

俺は何とも分かりやすい男だと思う。昨日は朝からうなだれていて母さんと何を話したかも覚えていない。

でも今日は母さんの笑顔が見たくて仕方なかった、母さんの声が聴きたくて仕方なかった。

マザコン上等。母親の笑顔が好きで何が悪い。

「あら、リュウちゃん。おはよう」

俺の声を聞いて、優しい笑顔で挨拶を返してくれる母さん。昨日も

そうだった筈だが、気構えが違うのだろうか、その笑顔は今日一日がやる気になれそうな笑顔だった。

「なあにリュウちゃん、何か良い事あった？」

綻んでしまっていた俺の表情から察したか、嬉しそうに訊いてくる。

「…い、いや。良い事はあったというか、これからというか…って  
いつか悪い事が起きるのは多分間違いないというか…」

そうだろう。今日、俺は八神に告白する。振られてしまうのを分か  
つていながらだ。

「????」

俺の言った事の意味が分からないのか母さんは首を傾げている。

「い、いや…違つんだ。えーと…母さんの笑顔が見れて嬉しかった  
だけなんだ…」

「つえー！」

あれ？

みるみる顔を紅くする母さん。

「母さん？」

「う、うん。ありがとう…嬉しい…」



下を向き、もじもじと指を絡ませながら言う。  
我が母親ながらかわいいのだが、どうしたというのだろうか……

準備が済み、しばらくして、家を出る時に起きて来た竜仁にかち合  
う。

「おはよ…兄ちゃん…相変わらず早いね…」

「うん、おはよう竜仁」

「あれ…兄ちゃん今日はなんか気合い入ってるね？どうしたの？」

「えっ？どうしたのって何が？」

「いや、いつもより髪の毛とかちゃんとしてるじゃん」

竜仁の言う通り、さっき洗面所でいつもの倍くらいの時間を掛けて  
身だしなみを整えた。

自分としては今日に限って気合いを入れるのはどうかと思う…しか  
し、八神に告白と考えると、あれじゃダメだこれじゃダメだって、  
いつもより小綺麗になってしまった。

「いや……今日、俺さ、八神に告白するから」

竜仁に言うてどうする？って感じだけど、なんとなく言うてしまっ  
た。

自分を追い詰めたかったのかもしれない。

「ふーん…そっか…はは、頑張つて。振られたら兄ちゃん大変だぞ

？」

思ったより淡泊な反応の竜仁。

「大変って何が？」

「エミが兄ちゃんの写メを学校で見せたらさ、兄ちゃんのパックラブが出来ちゃったんだ」

は？

「は？」

「ぶつ、ふははは！兄ちゃん、もっと自分に自信持ちなよ。兄ちゃんは俺の兄ちゃんなんだぜ？八神先輩だって大丈夫、オツケーしてくれるよ」

バシバシと背中を叩かれながら送り出されてしまった。

「…………？」

家を出た時間はいつも通り。

駅前に着いた時間もいつも通り。そう、いつも八神を迎えに来ていた時間、8時だ。

八神は先に行ってしまったているだろうが、今用事があるのは八神じ

やない。

…八神のお母さん、八神に告白する前にどうしてもお母さんに会っておきたかった。

昨日最低な事をしたというのもあるが、母さんと同じ様な理由…笑顔が見たかった、声が聴きたかった。

昨日と同じ様に待っていていたお母さん。

やはり伏し目がちに、やはり困った様な不安そうな表情。昨日とは違い、迷わず声を掛ける。

「おはようございます!」

「あつ、河本さん。おはようございます」

俺の声に反応して優しい笑顔で挨拶を返してくれる。

「やっぱり先に行っちゃいましたよね?」

とりあえず八神の事を訊いてみる。

「はい。なっちゃんったら、困った子なんだから…」

ため息混じりに言う。

「いや、すみません…俺のせいなんです。俺が無神経だったせいで、アイツの事怒らせちゃったんです」

隠すつもりは無い。

「あら、そうだったんですか…でも何日も拗ねちゃうなんて、なっ

「ちゃんも強情ねえ」

再びため息を吐きながら言う。

「…俺が勝手に菫さんの部屋に入ってしまったからなんです…すいません…」

俺の言葉に目を丸くする。

八神の友達として招かれていたとはいえ、八神同様お母さんにとってもあの部屋は易々と踏み行つてはいけない領域だった筈だ。

いくら知らなかったといつても、あの部屋に入ったのは間違いだった。

菫さんに申し訳ないのももちろんだが、棗…お母さんには絶対に謝らなければいけない。

「…そう…だったんですか…いえ、良いんです…河本さんはあつちゃんの事は知っていたんですか？」

あつちゃん…菫の事だろう。

「いえ…知りません。棗と会ったのも結構最近なんです」

「……そうですか…なつちゃん…それで怒っていたんですね」

感慨に耽る様に悲しそうな表情で言う…

「すいませんでした…」

「あつ、あつ、いえ、違うんです！ごめんなさい」

おたおたと慌てて訂正してくれるお母さん。  
心底申し訳なさそうである。

……本当にこの人は最高に良い人だ。  
俺を本気で気遣ってくれている。

「お母さん……」

「えっ？あつ、はい」

突然、自分の子供ではない俺に呼ばれてあたふたする。  
ちよっとかわいかった。

「今日、俺…素に告白します」

「えっ？」

どうかしてると思う。これから告白する女の子の母親にわざわざ報  
告するなんて、かなりの割合で前代未聞な筈だ。  
実際お母さんも目を丸くして驚いている。

「告白って…あの告白ですか？」

あの告白…つまりは愛の告白の事。  
うわぁ、こっと思つと恥ずかしい…

「は、はい。そうです。好きだって言います」

かなり恥ずかしい。

「あらあらまあまあ。ふふふ。羨ましいですね。なっちゃんずるいわぁ」

一気にほんわか指数が跳ね上がる。  
羨ましいって…

「い、いや。多分振られちゃうと思うんですけど…」

そうだよ。まだ告白した訳じゃないし、オツケーされた訳じゃない。半ば祝福されて、軽く舞い上がりそうだった。

「だーい丈夫ですよ。河本さんかっこいいし、優しいですから」

更にほんわか指数を上げ、ぺしぺし肩を叩きながら言う。  
いやいや…フォローは終わってからでお願いしたい。

「と、とにかく、そういう事なんで」

ほんわかフォローは痛いだけなので失礼だが学校に退散する事にする。

自転車を方向転換して、漕ぎだそうとすると…

「河本さん…なっちゃんをお願いします」

「えっ?」

背中越しに掛けられた声はさっきまでの弾んだ声ではなく、少しトーンを下げた真摯な声だった。

「なっちゃん…河本さんだけしか…いえ…河本さんもごく最近…  
なっちゃん…お友達…居ませんよね？」

振り向いて見たお母さん、声と同じ様に真摯な態度で…悲しそうだった。

そして、問掛けられた内容…

「…あ、えーと…その…」

お母さんの真摯な態度…誤魔化せる訳ない。

「良いんです…ただ河本さん…なっちゃんを…なっちゃんを助けて  
あげて下さい」

???

「助ける？」

「なっちゃん…あっちゃんの事故の事…自分のせいだって…言うん  
です…そんな筈なのに…。私じゃダメなんです…私も似た様なも  
のだから…」

今にも泣きそうなお母さん。  
堪える様に言葉を紡ぐ。

………

やっぱり八神の菫さんの事故の後の行動には理由がある。  
ケンジの言っていた噂は間違っていないけど間違ってる。

理由は分からない。

でも八神：お前、馬鹿だよ…

こんな優しい母親を泣かせるなんて…

告白したら結果はどうあれ、お説教だな。

「お母さん」

「…はい？」

顔を上げたお母さん。っていつか、もう泣いてた。

「俺は菖さんの事は知りません。俺は菖さんに会った事はありませんから…だから素に事故の事をどうこう言うつもりはありません。……でも…」

涙混じりの表情は相変わらずだが、真っ直ぐに俺を見つめてくる。

「アイツの友達はやめません。振られようが何だろうがやめません。俺…アイツが好きですから…」

「……………」

しーんとした。

くさい。確かに今のはくさかった。

流石のお母さんも反応する間も無く飽きれ…て…？



「えっ？」

ぼわ〜んとした様な…というか明らか様な恍惚な表情のお母さん。俺を見つめて『はふう』と熱っぽいため息を吐いている。

「河本さん…やっぱりかっこいいです…そんな素敵な事まで言えてしまうなんて…」

とろ〜んと潤んだ瞳で見つめてくる。先ほどの涙のせいか凄く艶っぽくて色っぽい。

「じ、じゃあ。そういう事だー！」

逃げた。

…八神宅で長居してしまつたお陰で学校に着いたのは遅刻ギリギリ、滑り込みセーフでHRに間に合った。

「リュウ、今日やっぱり決行か？」

後ろの席のケンジがひそひそと話し掛けてくる。

「うん、告白するよ」

前を向いたまま、ひそひそと返す。

「えっ？」

えっ？

「えっ？」

俺の返答に答えたのはケンジではなかった。

上の『えっ？』だが、上から隣の席の女子、俺、ケンジの順番だ。

「河本君…告白って…？」

何やら泣きそうな隣の席の女の子。

HR中という事もあり、振り向いている訳ではないが後ろのケンジも驚いている様子だった。

「……………うん」

とりあえず肯定。

「…そ…そう…なんだ…」

見るからに声のトーンを落とし、うつ向きしてしまう。

「……………？」

どうしたのだろうか？

隣の席だがほとんど話した事は無いけど、告白する俺を気遣ってくれてるのかな？

ま、とにかく、決行は昼休み。  
まずはJ組に行って連れ出さなければいけない。  
そして告白する場所は決まっている。

中庭のあの場所…

毎日の昼食場所としてお世話になったあの中庭…

八神と過ごした時間は少ないけど、俺にとって八神との思い出が一番詰まっている大切な所…

八神の笑顔が一番見れた場所だから…

昼休み。

遂に来てしまったとは思わなかった。待ち侘びていたという感じが、緊張も一切無かった。

八神の都合も知らん。どうせ一人きりで昼食を摂るに決まっている、問答無用で連れ出してやる。

今日の俺は自分でも驚く位に自己中だ。  
百パー八神の影響だ。

ずかずかとJ組に突入していく。

最早J組でも有名人の俺は注目的だ。

今までの俺なら尻込みしている状況だが、今日の俺は自己中だぜ。

かかってこいつて感じた。

「あれ…？」

勢い付いて来たのはよかったが肝心の八神が居なかった。参った。しおしおとやる気がしぼんでいく。

何処に行つたんだ？

恐らくJ組の連中は知らないだろう…八神が行き先を告げる筈無いし、行きそうな所を知っているとも思えなかった。

かく言う俺も八神の行きそうな所の見当はつかない…

………

…と、思っていたが八神はあっさり見付かった。

ふうと安堵のため息。顔も綻ぶ。

遠目から八神を確認した俺は周りを見渡す…

中庭…

計らずとも八神はここに居てくれた。

抜ける様な秋晴れ。

最近すっかり寒くなってきたお陰か、辺りにはちらほらと落ち葉が広がっている。

そういえば、衣替えしてからずいぶん経ってしまった。

ゆっくり近付いて行く。

空気は冷たいけどばかばかと八神を照らす太陽は暖かった。

少しだけ冷たい風が八神の髪を揺らしている。

綺麗に敷き詰められた芝生は八神一人では広すぎる気がする。

聞こえてくるのは喧騒。昼休み真っ最中、みんな楽しそうだ。でも、その楽しそうな喧騒は目の前の女の子を余計に寂しいものにしていく。

更に近付いて行く。あと少し。

寂しそうな八神。

一人きりの八神。

一二年校舎、三年校舎、特別棟、部室棟に囲まれた中庭。その中庭にある植え込みに囲まれた芝生…

俺達の指定席…

小さな八神…そこで一人、膝を抱えて小さく座っていた…



## 第十一話 決壊

毎日通う学校…

どうして行くかなんて気にした事なんて無かった。

…皆そうだと思う…

いい大学に入りたいから…

友達が居るから…

部活が楽しいから…

人それぞれの目的を持って毎日を送っているだろう…

八神…

目の前で一人ぼっちで膝を抱えている小さな女の子…

いったい何の為に学校に来ているのだろうか…

「よし…」

声を掛ける。躊躇いは全く無かった。

ぴくつと体を震わせる八神、こっちは向いてくれない。

「…うぜえヤツが来やがった…」

顔を伏せたまま、ぼそりと呟く。

「…もう昼飯は食べたの？」

「…消えろ」

膝の上で組んだ腕越しに俺を睨みつけ、言う。

今までの俺ならたじろんでいたかもしれない…

…いや、違うか…

威圧的な態度を取っている様だが、今日の八神は少し弱々しい。無理をしている様に思える。

ちよつと、むかついた。

「嫌だね」

きっぱり言い切る。

「ああ？」

顔を起こして明らかに怒った顔を見せる。少しいつも通りになってきた。



でも、まだまだ。一ヶ月半もの間、八神を見てきた俺に言わせれば『いつもの』八神ではない。

やっぱむかつく。

告白する前に説教か？

いや、まどろっこしい。一緒にやってしまおう。

お説教告白だ。…自分で思っておいて何だが、かなり馬鹿くさい…でも、何か乗ってきたぞ。

「おい、棗！」

少し高圧的に言ってみる。しかも初めて呼び捨てにしてみる。

女の子を呼び捨てにするなんて生まれて初めてだ、ドキドキしてしまふ。

「て、てめえ！あに呼び捨てにしてんだよ！」

くわっと、目を見開いて怒りを露にする八神：いや、棗。

ふん、今日の俺にそんな顔してもかわいいだけだ。

「うるさいな、別にいいだろ。だいたいお前、無理してんじゃねえよ」

はっきり言ってやる。

「てめえ！流してんじゃねえよ！それに無理してるって何だよ！意味分かんねえし」

俺の文句にムキになり始める棗。立ち上がり、人指し指でびしびし

しながら俺との距離を詰めてくる。  
よしよし、棗も乗ってきたみたいだ。

「分かんねえなら教えてやる。お前は寂しいんだよ！」  
そうだ。

棗は刺々しく一匹狼を気取っていたようだが、そうではなかったと思う。

周りに攻撃的なのも、その裏返しだと思う。

毎日一緒に居たから判る…

棗は生粋の寂しがり屋だ……

「はあ？寂しくなんかねえよ！」

有り得ないという感じで言い返してくる棗…  
押し付ける訳では無いが、分かってほしい…

俺…

お母さん…

きつとケンジも…

少しでも棗を気遣う人の心を理解してほしかった。

「あたしは一人で居るのが好きなんだよ！あたしの事なんかほっと

いて消えろって言ってたんだよ！」

「嫌だっって言ってたんだろ！！！！」

「！！！？」

俺の大きな怒声にびくつと体を縮こませる棗。  
酷く驚愕の様子で目を丸くしている。

ぷつつん来て怒鳴ってしまった。

でも棗の言った『嘘』が許せなかった。

「一人で居るのが好き？…ざけんな…じゃあ、どうしてここに居るんだよ…どうして俺が来るかもしれないここに居るんだよ…」

俺の怒声に脅える様な棗、後に続いた俺の静かな言葉にきよとんとしてる。

そうだ。自意識過剰かもしれないが、棗は俺を待っている様だった。

俺に見付けてほしくて…

学校の全員が怖くて…

隠れる様にここに居た…

棗を想えば想う程、そう思えてしまう…

「…嫌なんだよ…」

自分の口から発した言葉に胸の苦しみが増す。  
何かが込み上げてくる。

「…自分勝手なのは分かってる…でも、棗が一人で居ると辛いんだ…  
…棗が側に居ないのが辛いんだよ…」

驚愕の様子で俺の言葉を聴く棗。その表情が苦しそうな、困った様な、どちらとも取れない様な表情に変わる。  
俺がこれから何を言うか分かってるみたいだ…

「…友達だから…いや、それだけじゃない…俺…棗が好きなんだよ…」

気のせいだろうか…

周りの喧騒が消えた。

「……………バカ言うなや…笑えん冗談…言うなや…」

酷く苦しそうな困惑の表情の棗…

「…こんな恥ずかしい冗談言うかよ…」

「……………」

うつ向いて黙り込む棗……

言わば返事待ちの俺も何も言えなくなってしまふ。

お説教告白とは言ったものの説教自体は中途半端になってしまった。

俺と棗の間に秋風が吹く……

うつ向いている棗の表情は判らない……

人生初の告白だったが、やけにあっさりだった。

一向に喋らない棗……どうにも落ち着かない……

想像してみる事にした。

オツケーの場合。

『まあ、しゃーないか！いいやん、付き合ったる。……か、勘違いすんなや！付き合っつても、下僕にちよっとだけ優しくしたる程度やん？ちよっと優遇したる下僕やん？』

こんな感じ？

………

ごめんなさいの場合。

『ぎやはははは！あに言っつてやがるう！キモメンが真面目っ面でキ

モい事言つなや！寝言は寝て言えつての！寝言は寝て言えつての！  
ぷぷぷ、一回言つちやった…ぷっ…ぎゃはははは！』

ちよつと泣きそう…

アホな想像をしていたら、更に吹き付ける風の冷たさが増した。

うつ向き、黙り込む棗に視線を戻す。

「……………どうして……………どうして…優しく…するんだよ…」

…独り言の様に呟きだす棗…

「棗？」

問い掛けるとゆっくりと顔を上げる棗。

……………泣いていた。

小さな子供みたいに…

おねだりを受け入れてもらえない小さな子供みたいに…

泣いていた…

「優しくするな…よお……………！なんで…嫌って…くれないん…だよ…  
…！」

絞り出す様に…苦しそうに…でも、どこか安心した様に…言う。

「…棗…」

「…お前、おかしいよ！嫌な事いっぱいしたのに…！酷い事いっぱい言ったのに…！」

瞳に涙を溜めたまま、これ以上無いくらいの困惑を見せる棗。

「…そんな事ないよ…棗は優しいよ」

そんな事ないよ、棗は優しいよ

「…！！」

????

俺の言葉に驚く棗。

「棗？」

「…やっぱり…あたしに…そんな資格…無い…」

見た事無い棗の表情…

いや、表情は無い…無表情…

それも違う…

全てを諦めた様な絶望的な表情…

そんな表情を知ってる訳では無いが、棗の表情からは、そう感じ取

れた。

「資格？資格って何だよ？」

「あたしは…菫の幸せを奪ったんだ…あたしに友達を持つ資格も…おめえに優しくされる資格も…無いんだ…」

「……………」

何も言えなかった。

菫の幸せを奪った…

無意識に頭の中でその意味を考えようとしてしまっ。

どういう事か？

交通事故で亡くなってしまった菫…

一緒に居た棗…

無傷だった棗…

目の前に居る棗…

泣いている棗…

一人ぼっちな棗…

「…つざけんな！」

先ほどよりも大きく体を強張らせる棗。

棗に言ったつもりでは無かった。

言ったのは自分自身。知りもしないのに、棗の言葉を鵜呑みにして



しまった自分自身への怒りの声だ。

でも、言った瞬間に棗に掛ける言葉が見つかった。

驚かせてしまった棗に申し訳無いと思っていたが、次に続く俺の言葉には丁度良かったのでそのまま続ける事にする。

「棗。俺はな！苺の事を知らない。事故の事も知らなかった。棗が何に罪を感じているのかも知らない。」

「……？」

脅える様に俺を窺う棗。

そんな顔をさせてしまった事に胸が苦しくなる…

押し付けがましいと思う…

でも、俺が言ってあげなかったら、こいつはどうなってしまうんだ？

締め付ける胸の痛みを無視して言葉を続ける。

「俺は棗しか知らないんだよ！棗が棗だから好きなんだよ！」

私は私。棗は棗。みんながどう思っても私は棗が棗だから好きなんだよ？

「…うう…！！」

「苺の事故の時に何があったか分からないけど…苺は棗を恨んでる

のか？ 莒はお前を嫌いになるようなヤツだったのか？」

「… 莒はそんな子じゃない！」

嗚咽混じりだが、はっきりと言つる。

「だったら俺を友達でいさせてくれ…もし俺の想いが届くなら…受け入れてくれよ…」

目を瞑り、堪える様に唇を噛み締める。

棗が俺を受け入れてくれるかは別だが、きつと… 莒もそれを願っていると思う…

棗がここまで莒を思っているんだ…

どんな事があつたとしても、あのお母さんと棗の家族が棗を追い詰める様な事をする筈が無い…

「… 下… 僕…？」

困った様に俺を呼ぶ棗… いや、下僕は名前では無いが…

もしかしたら、どう呼んでいいか判らないのかも… 悲しいけど今まで棗は俺を『下僕』としか呼んでくれた事が無い。

「… 出来れば『リュウ』か『竜』って呼んでほしいかな？」

思いきって言ってみる。

「… りゅう… い… ち… … 竜…」

呼んでくれた。

嬉しかった。

「……………棗……………」

応える。

「……………あたし……………あたし……………」

よろよろと俺の側に寄る棗…制服を掴んで、俺の胸に顔を伏せる。

「……………同い年の友達なんか……………欲しくなかった……………！……………お母さんが居れば……………良かった……………！……………でも……………竜一には……………竜一には……………嫌われたく……………なかった……………！……………」

棗の叫びが俺に染み渡る。

「……………竜一……………！……………」

棗の制服を掴む力が強くなる。

「……………棗……………」

「……直江……！直江会いたいよぉ……！」

## 最終話 厄災治まる

いつも手を繋いでいた。

二人は一卵性の双子、産まれた時からずっと一緒だった。

一緒に居るのが当たり前だった。

一緒に居るのが大好きだった。

お母さんは家のお店の女将さん。

お父さんは長距離トラックの運転手さん。

お父さんは早くに亡くなってしまったけど、その共働きの両親のお陰であたし達姉妹はいつでも一緒だった。

元気で活発な昔…

内気で根暗なあたし…

勉強も運動もあたしより出来た。

同じ顔だったけどあたしよりかわいかった。

元気なお姉ちゃんには友達がたくさん居たけど、根暗なあたしには友達が一人も居なかった。

お姉ちゃんの友達と一緒に遊ぶ事はあっても、あたしはお姉ちゃんのおまけだった。

居ても居なくてもいい様な存在だった。

……別に良かった。

お姉ちゃん…菫と一緒に居てくれれば…

それで良かった…

『菫…無理してあたしと一緒に居る事ないよ…あたしみたいな暗いのと一緒に居ても面白くないでしょ?』

いつだったか訊いた事がある。

繰り返す日常であたしは卑屈になっていたのかもしれない。

『そんな事ないよ、棗は優しいよ?』

即答だった。

心が軽くなった気がした。

いくら自分で考えない様にしても、あたしの考え方はいつでも後ろ向きだった。

菫に迷惑を掛けているのではないか?

あたしが居ない方がみんな楽しいんじゃないか？

でも、莒は嘘を言わない。

だから嬉しかった。

胸の支えが取れた気がした。

優しい莒はあたしの自慢だった…莒の妹である事が自慢だった。

周りのみんながあたしの事をどう思っけていてもいい…。

何よりあたしが莒の側に居れる事が一番大切な事だった。

幼稚園からずっと登下校は一緒だった。

元気な莒はいつでもあたしの手を引いて連れ出してくれた。

どんな時でも一緒に居てくれた。

あたしなんかと一緒に居ても面白くないだろう、でも、莒はあたしの手を放さなかった。

不思議だった…。

なぜ莒はあたしと一緒に居てくれるのだろうか？

『私は私。棗は棗。みんながどう思っけていても、私は棗が棗だから好きなんだよ？』

何気無く言っけた莒。

当たり前のように言ってくれた。

…嬉しかった。

菫にとってはその事実が自然である事が伝わってきた。

だからこそ、余計に嬉しかった。

全く同じ顔の菫だけど、あたしに無い全てを持っていた。

菫はあたしの憧れだった…。

その菫があたしを好きだと言ってくれた事が、心から嬉しかった。

菫はあたしにとって全てだった。

その日も手を繋いでいた。

学校帰り…その日はいつも元気な菫が大人しかった。

気にはなっただけど繋いだ手の温もりだけで十分だったあたしは何も言わなかった。

『…棗…私…好きな人できた…』



あたしは菫の突然発した言葉の意味が判らなかった。

『…この前ね…学校の廊下でぶつかっちゃった男の子なんだけど…  
その…かつこよくて…優しい人だったんだ…』

世界が暗転した。

男の子？

あたしじゃないの？

『その時はかつこいいなあ位にしか思わなかったんだけど…気が付いたら、いつもその人の事考えてて…』

菫が何か言っているけど、あたしはショックで固まってしまった。

『…同じ一年生で…クラスは別…自信無いけど…私…明日…告白しようと思ってるんだ…』

告白？

意味が判らない…

顔を真っ赤にして言う姉はあたしを見ていなかった。

あたしを見ているけどあたしを見ていなかった。

菫の中にもうあたしは居ない…

『その人…河本竜い　　って、棗？』

昔の話が終わる前にあたしは走り出していた。

いつでも繋いでいた手を振り払って…

嫌だった。

一人になるのが嫌だった。

昔の中にあたしが居なくなってしまうのが怖かった…

昔の話を持ち払う様に夢中で走っていた…

そう、夢中だった。

その時、耳を劈く様な大きな音が聞こえてきた。

最初は異常に高音の耳障りな音…

急ブレーキの音？スクール音だっけ？

一瞬を挟んで低音の鈍い大きな音…

何かがぶつかった音？

何が？

音はあたしの走って来た方向から聞こえた。

菖は即死だった。

「　　うあああああ！！！！菖え！あやめええ！！！」

堰を切った様に「いや、そんな生易しいものではない。  
決壊した巨大なダムのように溢れていた。

涙だけでは無い。

棗の感情が溢れていた。

俺の胸に顔を埋め、俺の制服を力強く掴み、最早、叫声と化した声を上げ、泣いていた。

「…棗…」

言いたい事はたくさんあった。

でも、俺の口は開かなかった…。

俺は軽く見ていたのかも…しれない…。

狂った様に泣き叫ぶ棗に掛ける言葉が見付からない…。

いや、そんな言葉を俺は知らない…。

「…あたしが…あたしが手を離れたから…！あたしのせいなんだよ  
お！」

「……………」

事故の時の事を言っているのだろう…

お母さんは言っていた。

棗は昔の死を自分のせいだと思っている、と…

実際、棗は自分自身を嫌悪する様に言葉を紡ぐ…罪の告白の様に言葉  
を紡ぐ。

「あたしが…あたしが死ねばよかったんだ…」

「……………」

コイツは馬鹿だ…

棗にとって菖の死は果てしなく重い責であるのだろう。  
でも、お母さんはこうも言っていた。

そんな筈ない、と…

棗が流す涙の意味。

菖の為だ。

人の死を嘆くのはその人が大切だからだ。

目の前で激しく慟哭する棗……十分だ。

…言葉は知らない。

だから俺は抱き締めた。

肩に置いていた手を背中に回し、引き寄せる。

はつきり言っただけの子とここまで密着したのは初めてだ。

奥手の俺は女の子と手を繋いだ事も無い。

棗を送迎していた時の密着とは違う。種類が違う。

でも、こうするべきだと思った。

躊躇いも無かった。

棗の反応は薄い。

でも、嫌がる様なそぶりは全く無い。

俺に身を任せる様におとなしい。

「…竜…あたしと一緒に居ると…迷惑？」

聞こえるか聞こえない位の小さな声で棗が呟く。

「全然」

即答する。当然だ。

「みんなに…嫌われちゃうよ？」

俺の胸の中で小さな棗が小さな声を再び洩らす。

「別にいい」

考えるまでも無い。

俺は棗が好きなんだ。告白する前はただ漠然と好きという感情だった。

今は違う。

いとおしい…と、いうのだろうか…一瞬でも離れたくない。

好きな女の子がこんなに苦しんでいたんだ。

守りたくなるのは当然だ。

俺の胸で小さくなっている棗。

もう涙は収まった様で、静かに俺に身を任せている。

安心してくれたみたいだ。

「…あのう、ちょっといいですかあ？」

ん？

棗の声にしてはちょっと低い声だな。

棗はもっと高くて舌っ足らずのかわいい声の筈だ。



思わず、あんぐりしてしまっ。

「…って、俺の告白を止めるって何だよ？」

とりあえず気になった事があつたので聞いてみる。

「…今まではむかつくから言わなかったけど、お前…めちゃくちゃモテるんだぞ？」

「は？」

「お前…やっぱり知らなかったんだ…相当なんだぞ？…裏では『久住ヶ丘高校二年かつこいい男四天王の一人』とか言われてるんだよ…お前…」

「…な…なにそれ…」

裏って何だよ…  
意味がわからん。

更にあんぐりしていると、本鈴が鳴り響く。  
午後の授業が始まってしまった…。

「…八神…さん…」

後ろに居たギャラリーの女子の一人が棗に話し掛ける。同時にその女子もケンジと同じ様に俺に申し訳なさそつな視線を寄越す。



「……………」

俺の胸の中で小さくなっている棗は何も答えない。聞こえてはいるだろう。

「ひとつだけ教えて？どうして、みんなに嫌われる様な事をしたの？」

棗の慟哭をずっと見ていたのだろう…その女子は棗を気遣う様に優しい声で尋ねる。

「……………」

やはり棗は何も答えない。

…その女子の質問…

俺も知りたい。

絶対に理由がある。

この状況を利用してというより、今、答えなければ棗はずっと嫌われたままだ。

そんなの間違ってる。

「棗…俺も知りたい」

だから俺も正直に棗に尋ねる。

周りの他のギャラリー達も固唾を飲んで棗の言葉を待っている。

「…人が死んじゃうと…忘れちゃうんだよ…」

顔を俺の胸に伏せたまま呟く棗。

「…どんなに仲良しだった人でも…その人が居なくなれば、忘れちゃう…あたしのお父さんがそうだった…」

「…棗…」

静かに語る棗は痛々しい…周りのギャラリも悲痛な表情で見守っている。

「…嫌だった…菫の事を忘れて欲しくなかった…あたしに菫の真似は出来ない…根暗だし…上手く喋れないし…でも…あたしと菫は同じ顔…あたしが目立てば菫の事を忘れないかもしれない…だから…みんなに嫌われよう…そう思ったんだよ…」

「…なつちゃん…」

質問をした女子が泣きそうな顔で棗を呼ぶ。

愛称で…多分この女子は菫の友達だったんだろう…棗の事も昔から知ってるんだ…

「それに…菫の事故はあたしのせい…！あたしなんか、みんなに嫌われてる位でちょうどいいんだ…！」

顔を上げ、先ほどと同じ様に自分自身を蔑む棗。感情が振り返したか再び泣きそうな表情になる。

「… なっちゃん… 違う… それは違うよ… あの事故の時にあっちゃん  
は一人だったんだよ？ なっちゃんは悪くないんだよ？」

「えっ？」

優しく諭した様な返答に驚いたのは俺だった。

「嫌な風に広がっちゃった噂もあるみたいだけど、あの事故がなっ  
ちゃんに関係無いのはみんな知ってるんです。 なっちゃんはその場  
所に居なかったんだから…」

どういう事だ？

「でも！ あたしが手を離れたから！ 逃げたから！」

「何があったのか分からないけど… あれは事故だったの… なっちゃん  
が悪い筈ない… それは、ずっと前からみんな納得していた… でも  
…」

話を切り、悲しそうな表情を更に強くする。  
いや、どこか申し訳なさそうだ。

「優しくかったなっちゃん… 変わっちゃったと思ってた…！ でも、違  
った…！… なっちゃん… ごめん… 私達がもつと… なっちゃんの話  
を訊いてあげれば… ごめんね… ごめんね…」

感極まった様に涙を流す…

「… やめてよ！ 悪いのはあたしなのに！ あたしが馬鹿だから！」

お互いに譲らない様に謝り、否定する二人。

やっぱりみんな知っていたんだ… 棗の優しさを…

きつと… 菖の優しさを想うと変わってしまった棗が許せなかったんだらう…

でも違った…

棗だって苦しんでたんだ…

誤解なんかじゃない… それほど菖の死は悲しい事だったんだ…

悲しい事実は消えない。

けど… 棗が苦しむ事はない…

それだけは絶対に間違いない…

「リュウ… まあ、その… 良かったな」

側に来たケンジが言う。その言葉にいろんな意味の解釈をしてしま  
う。

「ああ…」

「とりあえず… みんなで怒られに行くか？」

怒られに行く。本鈴からは暫く経っている。授業なんかとつくに始

まっている。

当然、先生に怒られる。

「…そうだな」

それはいいかもしれない…

なんとなく一緒に怒られるというのは仲間同士という気がする…

たった一人で怒られるのとは訳が違う。

棗はもう一人じゃないんだ。

とても悲しい事だと思う。

実際に首を知らない俺がこう言うのは浅はかかもしれない。

でも、棗の苦しみは分かる。

百分の一かもしれない、千分の一かもしれない…

棗が好きだから…棗と一緒に居たいから…その苦しみが分かる…



「ぷぷぷ。痛てて〜だつてよ!ぷぷぷ!」

目に涙を溜めて笑う棗…ほっぺたが異常に痛い…恐らく棗が悪戯をしたんだろう。

飽きれと怒りと嬉しさが込み上げてくる。

…嬉しさが大半ではあるが…

「ぷぷぷじゃないでしょ!どうして、ここに居るのか訊いてるの!学校まではまだ早い時間でしょ!」

でも、とりあえずはほっぺの痛みと合わせて『めっ』って感じで怒り気味に言う。

「だつて…早起きしちゃったから…早く会い……」

はっとした様に言葉を切る棗…

みるみる顔が紅くなっていく。

早く会い………たい?

棗の反応から間違いないだろう。先ほど以上の嬉しさと恥ずかしさで俺の体温が上がる。

「…棗…」

優しく呼ぶ。

紅い顔もそのままに泣きそうな表情で見返してくる棗。ちなみに非常にかわいい。

朝7時に見つめ合う制服姿の棗とパジャマ姿の俺…

「ずがっ!!」

「っはぶっ!?!」

見つめ合ったまま、俺に棗のヘッドバッドが直撃した。痛い! 頭を押さえて蹲ってしまう。ちなみに棗も同じ体制になっている。照れ隠しだらうけど何て事しやがる。

「ちっ」

何やら舌打ちみたいなのが聞こえてきたので、そっちをしてみる。

「あ」

半開きになった部屋の入り口に居る母親と弟と目が合った。

「に、兄ちゃん…おはよう」

「リュウちゃん、おはよお」

ボタン

引き吊りながら挨拶してくる弟といつも通りの笑顔の母さんを見無視して扉を閉める。

「……………はあ……………」



同時にため息…そのまま振り向くと痛みからか涙を溜めた棗がちょこんと座っていた。

それはもう非常〜にかわいい…かわいい…

あの告白からしばらく…

俺の告白を受け入れてくれた棗…最初は角が取れた様におとなしかったが、日を追うにつれ毒舌は復活し、ご主人気質たっぷりの棗に戻ってしまった。

告白しても、ご主人棗>下僕俺、の方程式は変わらなかった。

そして、学校だ。

今までとは全く違う。

棗を嫌うヤツがぱったりと居なくなった。

相変わらず毒舌を振り撒く棗に対して、みんな積極的に話し掛けて来る。

俺の告白の時の話は綺麗に全校に広まっていた。…多分あの草の友達が広めたのだろう…

少しずつ…本当に少しずつだが、棗の友達が増えてきている。

「…おい、早く着替えろよ！いつまでその格好でいるんだ？」

棗の声に回想を中断する。

「あ、ああ。着替るよ…着替えますとも」

結局いつも通りの時間になってしまった様で、のんびりする間も無く学校へと出発する。

棗を後ろに乗せ、マイチャリを必死に漕ぐ。定番と化したこのスタイルに朝から俺の顔も緩む。

下僕の時と殆んど変わらないけど、変わってる。

俺も…

棗も…

周りの連中も…

「棗！」

後ろの棗に声を掛ける。

「…あんだよ？」

ぶっきらぼうに答える棗。

「愛してるぞ」

気持ちは本気だが、半ば冗談めいた口調で言う。

「　　にゃ！なななな！」

後ろに乗っているので顔は見えないが、中々笑える反応をする棗。

「ははは！ちょっと飛ばすぞ！」

後ろでパニックってる棗も微笑ましく、自転車を漕ぐ足に力を込める。

「わわわ！こら！竜一！ちょっと怖いよ！」

そう言いながら棗も掴んでいる手に力を込める。

学校に行くのが楽しみだ。

きつと棗も…

今、棗の携帯の電話帳の登録は15件である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6321c/>

---

全校生徒の嫌われ者

2010年10月11日04時50分発行